国道四三一号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

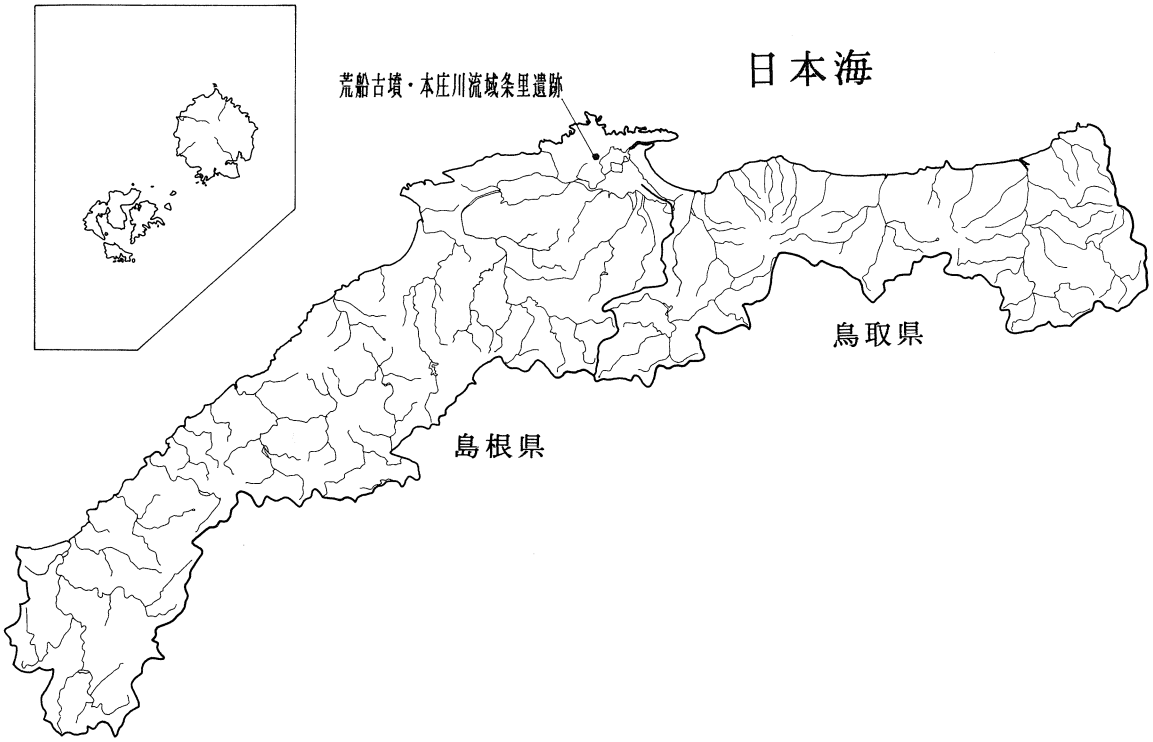
荒船古墳群・荒船遺跡
本庄川流域条里遺跡(2)

平成一〇年三月
島根県教育委員会

国道四三一号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

荒船古墳群・荒船遺跡
本庄川流域条里遺跡(2)

平成一〇年三月
島根県教育委員会



遺跡位置図

はじめに

島根県では国道四三一号線の交通量の増大に伴い、松江市西川津町から本庄町の間にバイパスの建設を計画しました。これを受けて昭和四八年には島根県教育委員会によって建設予定地内の遺跡分布調査が実施されました。この分布調査からすでに十数年が経過し、この間いくつかの遺跡については発掘調査が完了し、報告書を刊行してまいりました。

今年度は、昨年度に引き続き松江市上本庄町にある本庄川条里遺跡と荒船古墳群・遺跡の発掘調査を行いました。その結果、古代集落跡が発見され、古代条里制が連綿として、現代まで続いていたことがあきらかにされ、この地域の歴史を知るうえに貴重な資料を与えてくれました。

この報告書が多少なりとも埋蔵文化財に対する理解に役立てば幸いと思います。

発掘調査にあたりましては、調査指導の先生方をはじめ、各方面からの多くのご支援、ご協力をいただきました。衷心よりお礼を申し上げます。

平成十年三月

島根県教育委員会教育長　江口博晴

例　言

一、本書は島根県教育委員会が平成九年度に土木部道路建設課から委託を受けて実施した本庄川流域条里遺跡、及び荒船古墳群・遺跡の発掘調査報告書である。

二、事務局は島根県教育庁文化財課におき、発掘調査は島根県埋蔵文化財調査センターが行った。

三、発掘調査の指導は、渡辺貞幸（島根大学）、下条信行（愛媛大学）の先生方から承った。

四、発掘調査の実施にあたっては次の方々や関係期間のご協力と参加があった。（順不同・敬称略）

中村唯史（日新技術コンサルタント）、渡辺正巳（川崎地質）、梅木謙一（松山市・埋蔵文化財センター）、河野正文（藤山歴史資料館）、河口雄三（松山市・埋蔵文化財センター）、水口あをい（松山市・埋蔵文化財センター）、橋本雄一（松山市・埋蔵文化財センター）、今岡稔、吉田広（愛媛大学）、矢島律子（町田市立博物館）、岡野智彦（中近東文化センター）、関口広次（青山学院大学）、本庄公民館運営協議会、松江市教育委員会、松尾芳美、井上金一、田村清、松本長子、長谷川敦子、三成直子、福島幸代、福島秀香、福田巌、松本昭雄、野津薫、米田喜美恵。福田定男、木村カヨ子、大谷幸子、松本美佐子、井口清、井口トミ子、田川博之、坂根栄、木村喬、近藤静代、吉儀傅、大筒肇、永島雄三、田部茂、田部千恵子、永島八重子、佐藤光男、小瀬福夫、本多正貴、角亮太、内田恵美子、渡部浩好、岡崎雄二郎、瀬古諒子、江川幸子、津森豊年、片岡善貞、金津まり子、関和彦、瀧音能之、平野卓治、田川喜美子、吉儀隆子、小瀬千代子、石倉春枝、沼田幸夫、小原本衛、高倉重夫、奈良井崇夫、今村朝男、今村ひろ子、松本洋次郎、藤井武美、土江耶恵子、松本和代、井上幸夫、安達幸江、鈴木敦子、松本澄枝、古藤幸子、今村シズ子、矢田弘、中村陵子、谷戸節美、浅井順子、松本達子、藤井久志

五、調査員として、島根県埋蔵文化財調査センター職員の内田律雄（調査第三係長）、清水初美（調査補助員）、石原隆文（調査補助員）、野津旭（調査補助員）があたった。

また、研修生として、チャン　ドゥック　アイン　ショーン（フエ遺跡保存センター・フエ皇宮美術博物館【ベトナム】）の参加があった。

六、本書の編集・執筆は右記調査員や調査指導者の指導と助言を得ながら内田律雄が行った。

目次

第一章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・一
第二章　周辺の主要遺跡と調査の概要・・・・・・・・・二
第三章　本庄地区の石塔等・・・・・・・・・・・・・三三
第四章　本庄川流域条里遺跡発掘調査に伴う花粉分析・・・・・三七
第五章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・四七
写真図版

第一章　調査に至る経緯

大社町から美保関町を結ぶ国道４３１号線は昭和四〇年代後半から交通量が増大しはじめ、現在では県内有数の渋滞路線となっている。島根県ではこの対策の一環として松江市西川津町―本庄町間のバイパス計画を立案した。

バイパスの路線決定に先立ち、島根県教育委員会では松江土木建築事務所から依頼を受けて分布調査を行い二六カ所の遺跡を確認した。これをもとに島根県土木部道路課、松江土木建築事務所と島根県教育委員会は協議を行い、遺跡をできるだけ保存する方向で道路建設予定地が選定された。

発掘調査は島根県教育委員会によって昭和五一年から断続的に行われており、今年度は五次目の発掘調査にあたる。今年度の調査は松江市上本庄町字大坪を中心とする本庄川流域条里遺跡の発掘調査を行った。

これまでに行われた発掘調査を以下に示すと、次のようである。

昭和五一年度　橋本遺跡　柴遺跡　中頭遺跡
昭和五六年度　柴遺跡
昭和六二年度　祖子分長池古墳　祖子胡麻畑遺跡
平成四年度　八色谷古墳群
平成八年度　本庄川流域条里遺跡

注

1、『主要地方道松江―境港バイパス関係埋蔵文化財調査報告』Ⅰ　島根県文化愛護協会　一九七六
2、『主要地方道松江―境港バイパス関係埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　島根県教育委員会　一九八二
3、内田律雄『祖子分長池古墳』島根県教育委員会　一九八八
4、柳浦俊一「八色谷古墳群」『国道四三一号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　島根県教育委員会　一九九三
5、内田律雄『本庄川流域条里遺跡』Ⅴ　島根県教育委員会　一九九七

第二章　周辺の主要遺跡と調査の概要

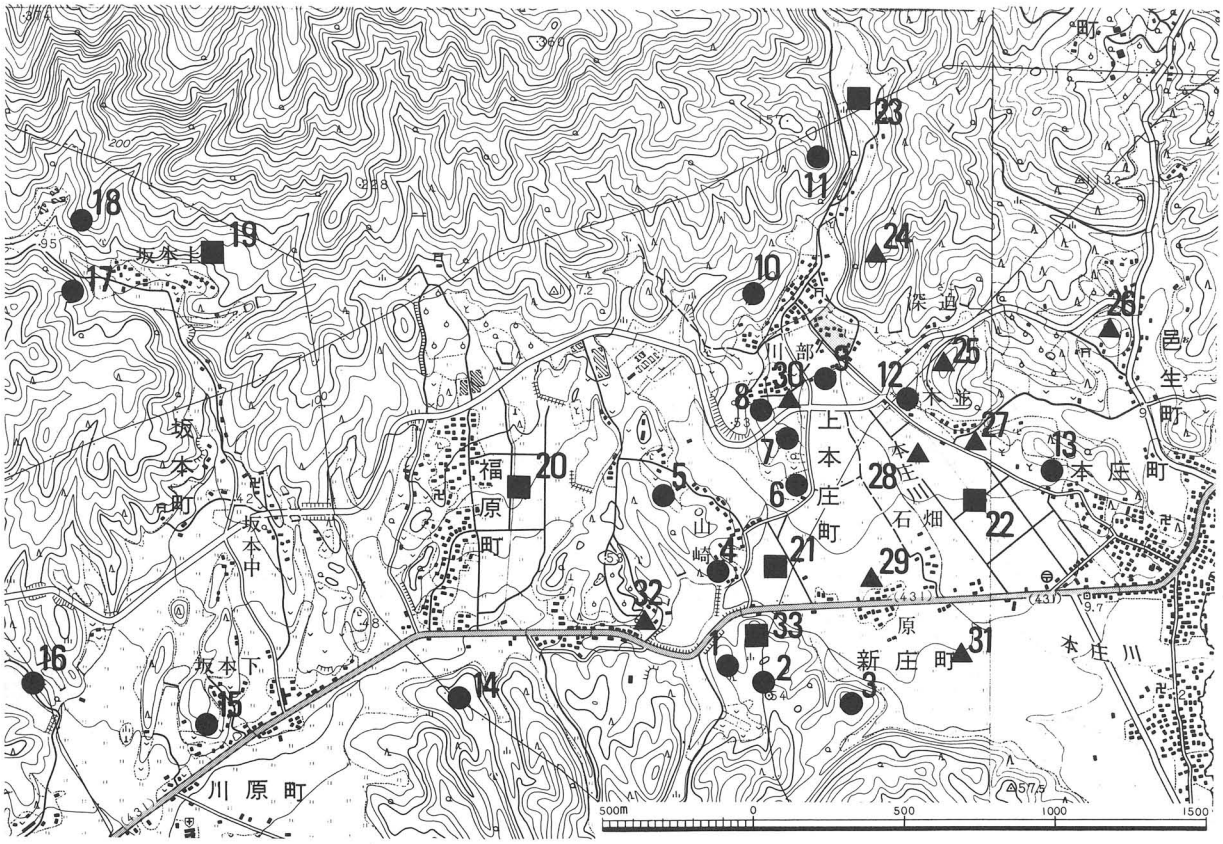
一、周辺の主要遺跡

本庄川流域で最古の遺物は新川下流域で採集されたルヴァロア型尖頭器である[1]。これに続く時代の石器が今年度上本庄町の山中（A条c里24付近[2]）で出土している[3]。同様な資料は周辺では上宇部尾町[4]、西川津町[5]でも出土している。これらはいずれもいまのところ嵩山から派生する低丘陵の谷間で発見されている。これらに続く縄文時代の遺跡は本庄川流域では顕著でない。遺跡が増加するのは弥生時代後期になってからである。古墳時代になると本庄川流域平野部の周辺丘陵上に前期から後期にいたるまで小規模な古墳がつくられ、集落も平野部に発達する。新庄町八日山一号墳は前期古墳の好例で、一辺二三・五メートル、高さ二・七メートルの小方墳であるが、岐阜県各務原市の一輪山古墳と同笵の三角縁神獣鏡（波文帯四神二獣鏡）が発見されている[6]。千歳遺跡（A条b里33坪、第1図21）は古墳時代集落の一例で、須恵器、土師器が出土している[7]。律令期になると集落は平野部周辺にもみられるようになり、条里が敷かれた。本庄川上流部の渓谷部の梨谷遺跡もその一つで（第1図23）、律令期を中心とする須恵器、土師器が出土している（第3図）[8]。

二、荒船古墳群

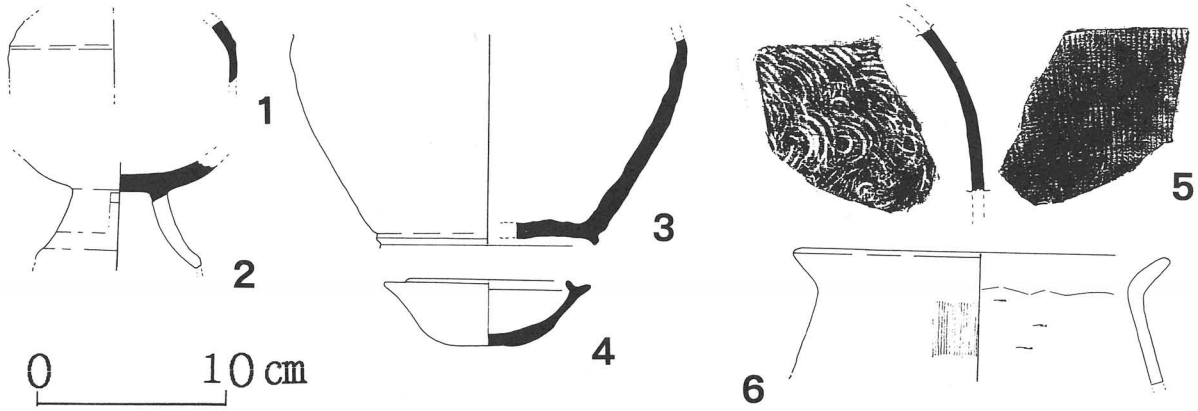
荒船古墳群（第1図1、図版1上）は上本庄町山崎にある四基の小方墳からなる古墳群である（第4・5図）。古墳郡の存在する南高北低の馬背状丘陵全体が幾度かの人工的削平をうけており、四基の古墳も築造当時の形状はとどめていなかった。最南部に位置する1号墳は一辺一二メートル（図版9下）、2号墳は一辺一〇メートル前後に復元できる方墳である（図版10上）。

調査対象となったのは、3・4号墳である。3号墳（図版1下）は2号墳の北に接してあり、墳丘上で検出した主体部を中央にして復元すると一辺約一〇メートルの方墳となる。墳丘南側裾は調査対象外であるため不明であるが、北側裾に長さ七・五メートル、幅一・五メートルの切削溝を検出した（図版2下、図版3上）。切削溝は薄赤褐色土の単一層である。主体部は表土直下に東西方向に検出されたが、西側端は既に盛土がなく不明である（図版5下）。幅は約七〇センチ、長さは二メートルまで確認できる（第8図）。遺構検出面からの深さは、深いところで五センチである。周辺の茶褐色盛土よりわずかに薄い色で、長方形の木棺直葬の痕跡である。盛土の下には旧表土が認められた。こうしたことから、尾根の高い南側を削平し低い北側に盛土して方墳を形作ったと考えられる。当地方に普遍的にみられる小規模古墳の築造方法である。

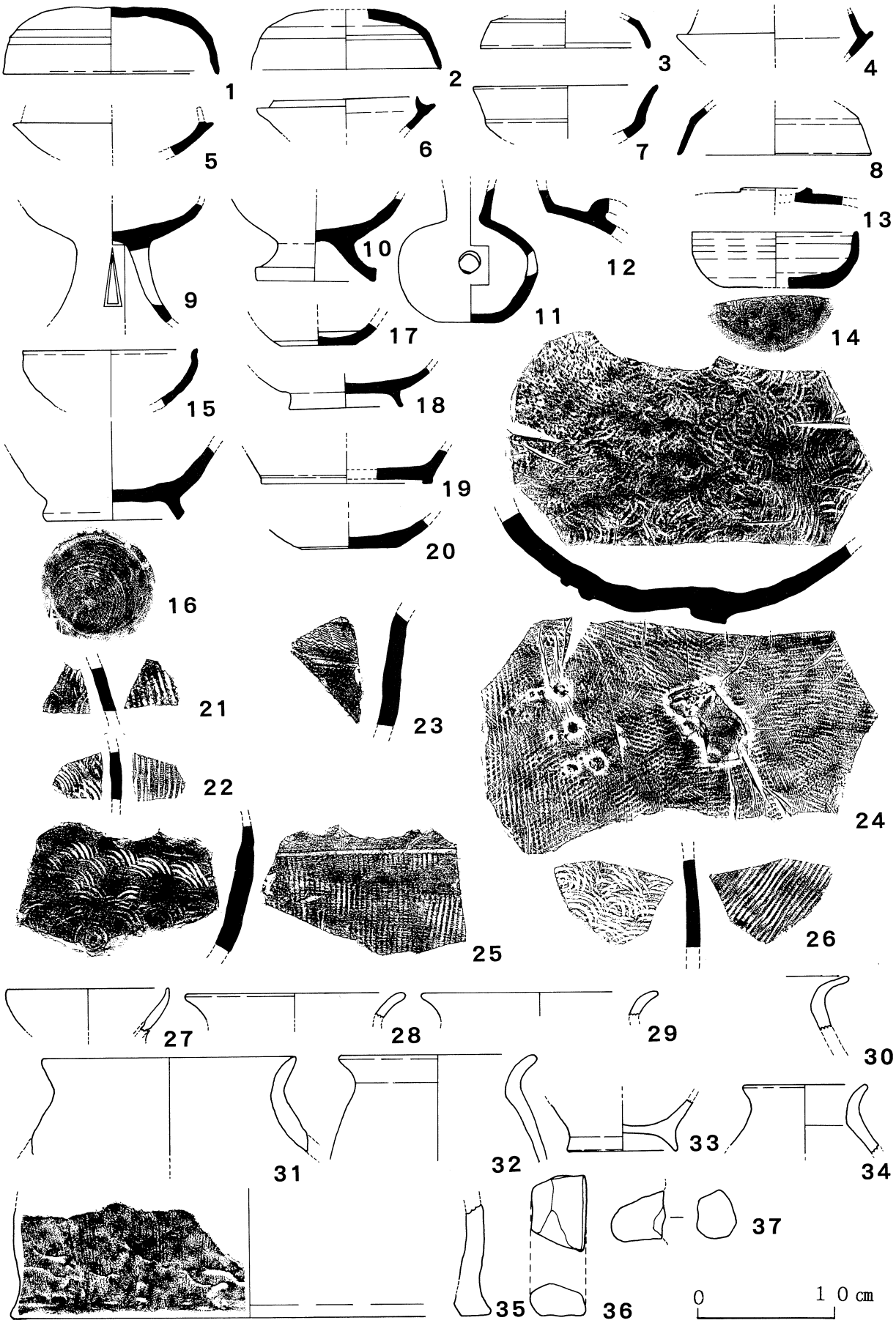


第１図　関係遺跡分布図

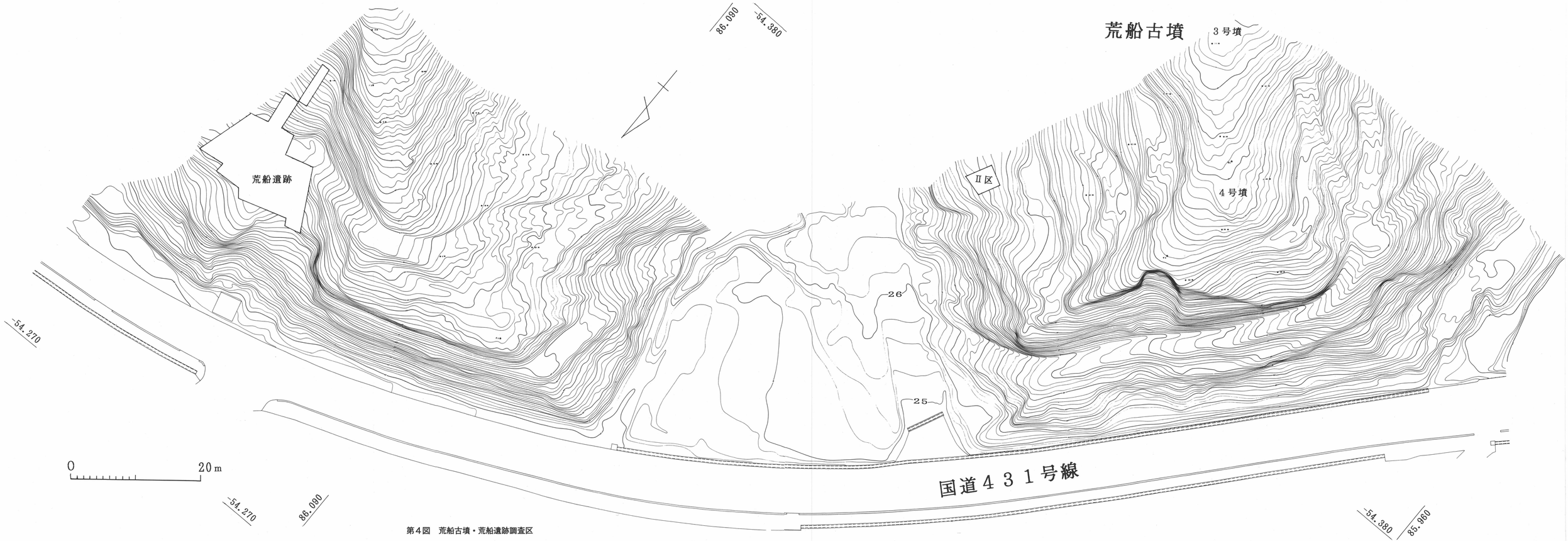
1．2．荒船古墳群、3．松音寺古墳、4．山崎古墳、5．平田古墳群、6．荒神古墳、
7．8．9．中西古墳群、10.金比羅古墳群、11．鎌ロガ尾根古墳群、12．廻田古墳、13．尊場古墳、
14．（R431予定地内古墳）、15．薄井原古墳、16．常熊古墳、17．小川善之助裏古墳、18．古妙見古墳、
19．房床廃寺、20．芝原遺跡（島根郡家推定地）、21．千歳遺跡、22．本庄川流域条里遺跡、
23．梨谷遺跡、24．あん山城跡、25．城山城跡、26．上松古墓、27．木並石塔、28．横枕橋付近石塔、
29．門脇氏宅裏石塔、30．阿弥陀堂石塔、31．塚田石塔、32．島根大学農園内石塔、33．荒船遺跡



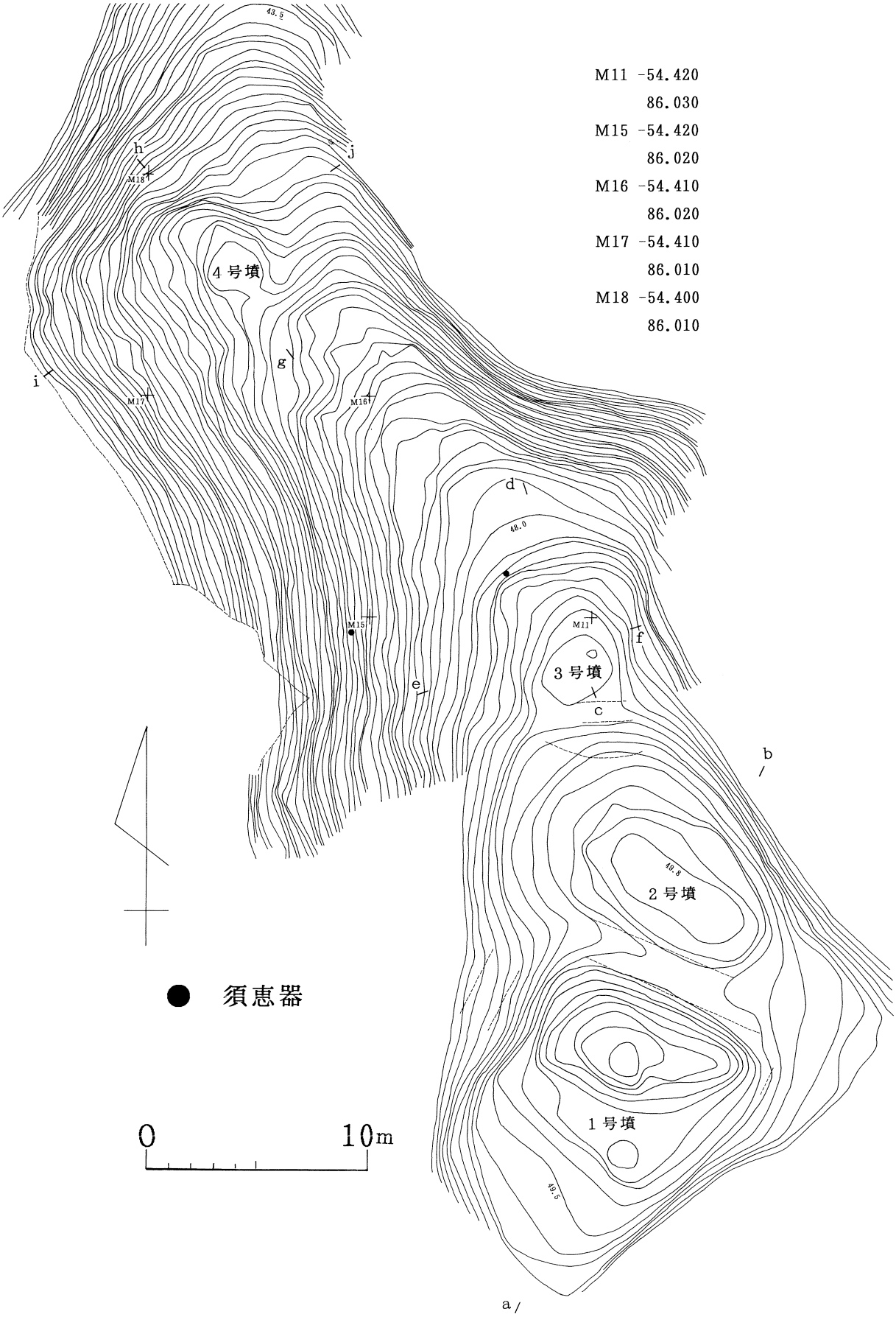
第２図　千歳（Ａ条ｂ里33坪）出土遺物



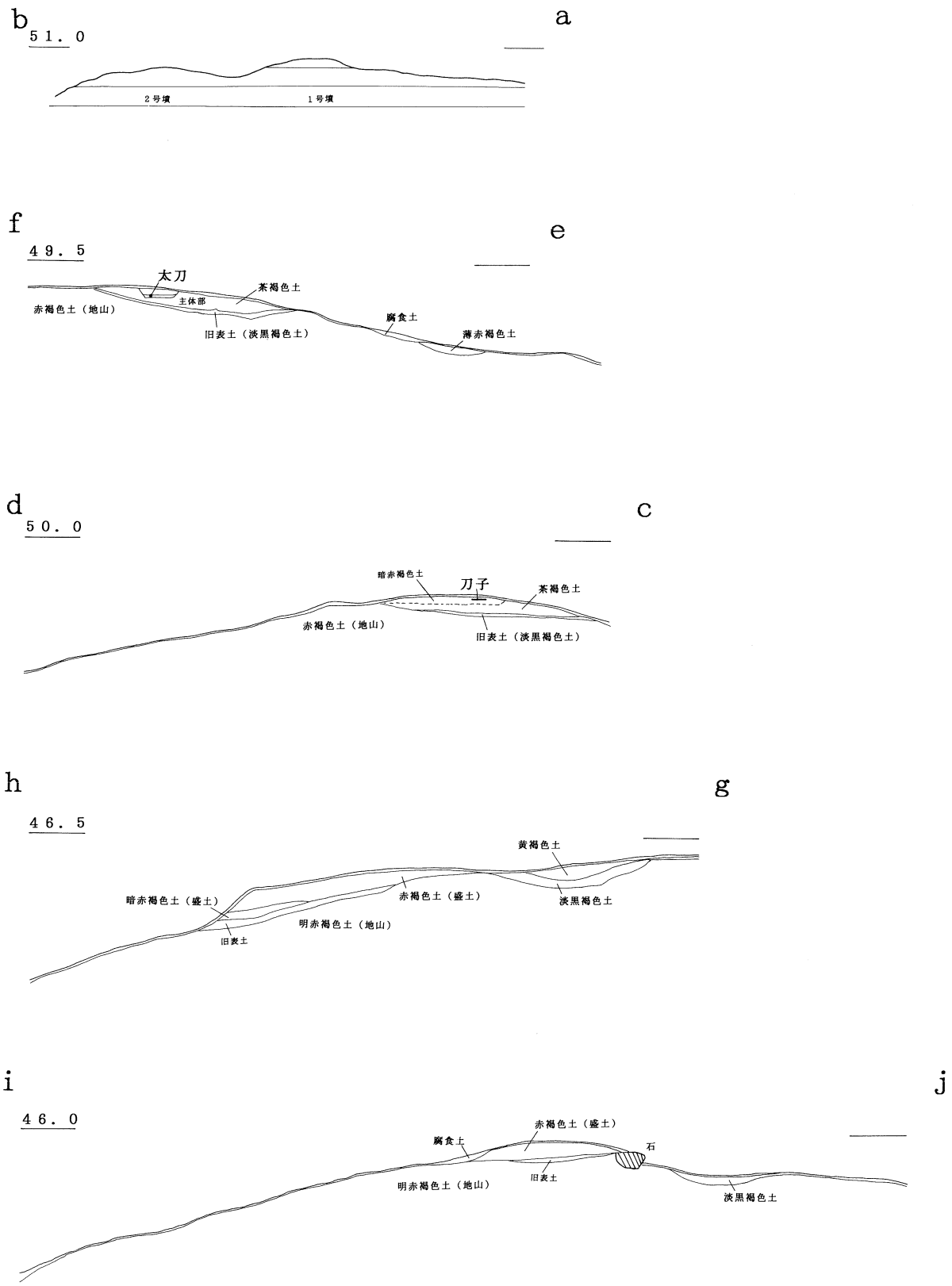
第3図　梨谷遺跡出土遺物



第４図　荒船古墳・荒船遺跡調査区

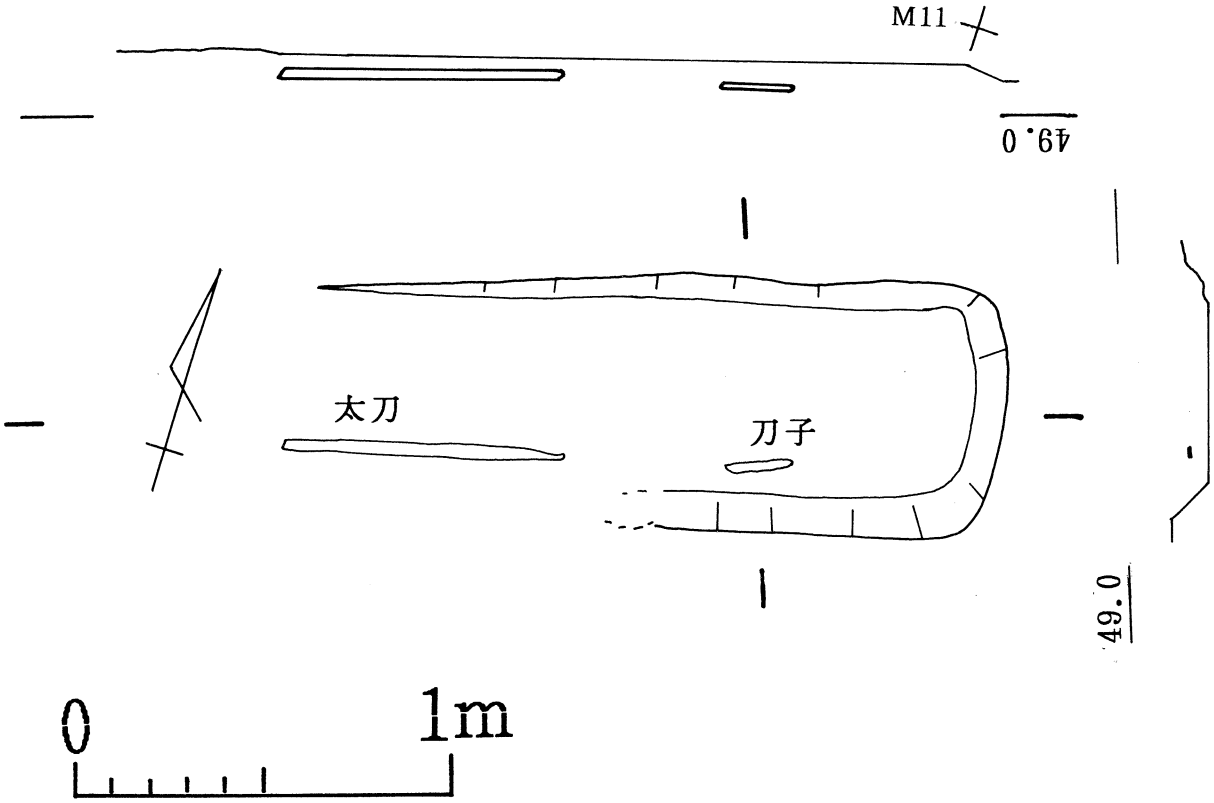


第5図　荒船古墳群測量図（調査前）



第6図　荒船古墳群断面図

第7図　荒船古墳群実測図（3・4号墳：調査後）



第8図　荒船3号墳主体部

遺物は主体部分から直刀（図版4下、図版5上）と刀子（図版6上）が出土した。直刀は一部を欠損するが、長さ約七五・〇センチに復元され、五一八・〇グラムを量る（第11図1）。刀子は一部を欠くが、長さ一一・〇センチ、重量は一六・〇グラムある（第11図2）。また、北側切削溝付近墳丘の表土直下と丘陵西側斜面より（第5図）須恵器蓋坏（第11図4接合資料、図版3下、図版4上）が、丘陵東側斜面より土師器坏（第11図3）が出土した。口径一四・五センチ、器高五・〇センチに復元される。須恵器は山陰第三期（六世紀後半）のもので、口径一一・七センチ、最大径一四・二センチ、器高三・九センチあるが、土師器坏はこれにやや先行する時期のものであろう。主体部の直刀部の直刀の形態からして須恵器より土師器の時期に符合する。そのことは墳丘がかなりの部分削平や流出していることを示しているが、古墳築造後時期をへだてて何らかの祭祀が行われた可能性があろう。

4号墳（図版6下）は3号墳の北西約一五メートル位置にある。既に主体部は失われていたが、旧表土、盛土、墳丘裾を南から東へまわる切削溝を確認した（図版7）。地山の中には長さ一メートルをこす泥岩が含まれ（図版8）、墳丘はこれを残すかたちで盛土が行われたようで、主体部は3号墳と同様に盛土の中にあったことが知られる。墳丘の北側と西側は特に盛土の流出が顕著で復元は困難であるが、一辺一〇メートルに満たない小方墳であったと思われる。遺物も発見できなかった。

三、荒船古墳群Ⅱ区

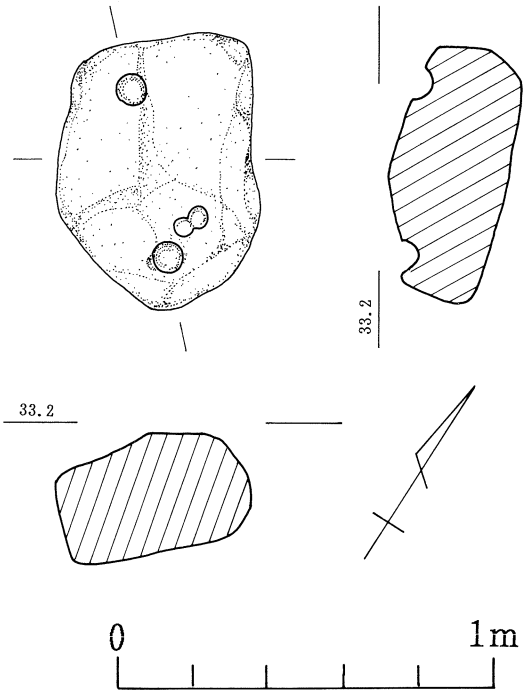
荒船古墳群東側斜面に坏状穴のみられる泥岩質の石を表土直下で検出した

（第9図、図版11下）。長さ六〇センチ、幅五〇センチ、厚さ三〇センチで、四ケ所に坏状穴がある。観察の結果人工のものではないと判断されたが参考のために掲げておく。孔は径八センチ、深さ四センチ～径五センチある。同様な石は荒船古墳群のある丘陵に自然に含まれているものであり、丘陵の削平にともなって東側斜面に転落したものと思われた。

四、荒船遺跡

荒船古墳群の東側の丘陵上に、径一〇メートルほどの平坦面があり、これを中心に調査を行ったところ遺物包含層を確認した（第4図）。遺跡は先端が二俣状に広がる平坦地にあり、平面が溝状に入り込んだ東西方向に黒褐色土が数条並行に検出された（第10図、図版10下）。これは幾度かの地滑りの痕跡と考えられ、遺物もこの層から出土した。遺構は検出できなかった。

遺物は弥生時代後期の土器（第11図5、6）と律令期の須恵器（第11図7～10）がある。5は口径一四・四センチ、6は一五・四センチ。7は口径一一・八センチ、器高一・八センチある。7、9は外面底部に回転糸切痕があり、10にはいわゆるカキメがみられる。



第9図　荒船3号墳群Ⅱ区

五、本庄川流域条里遺跡

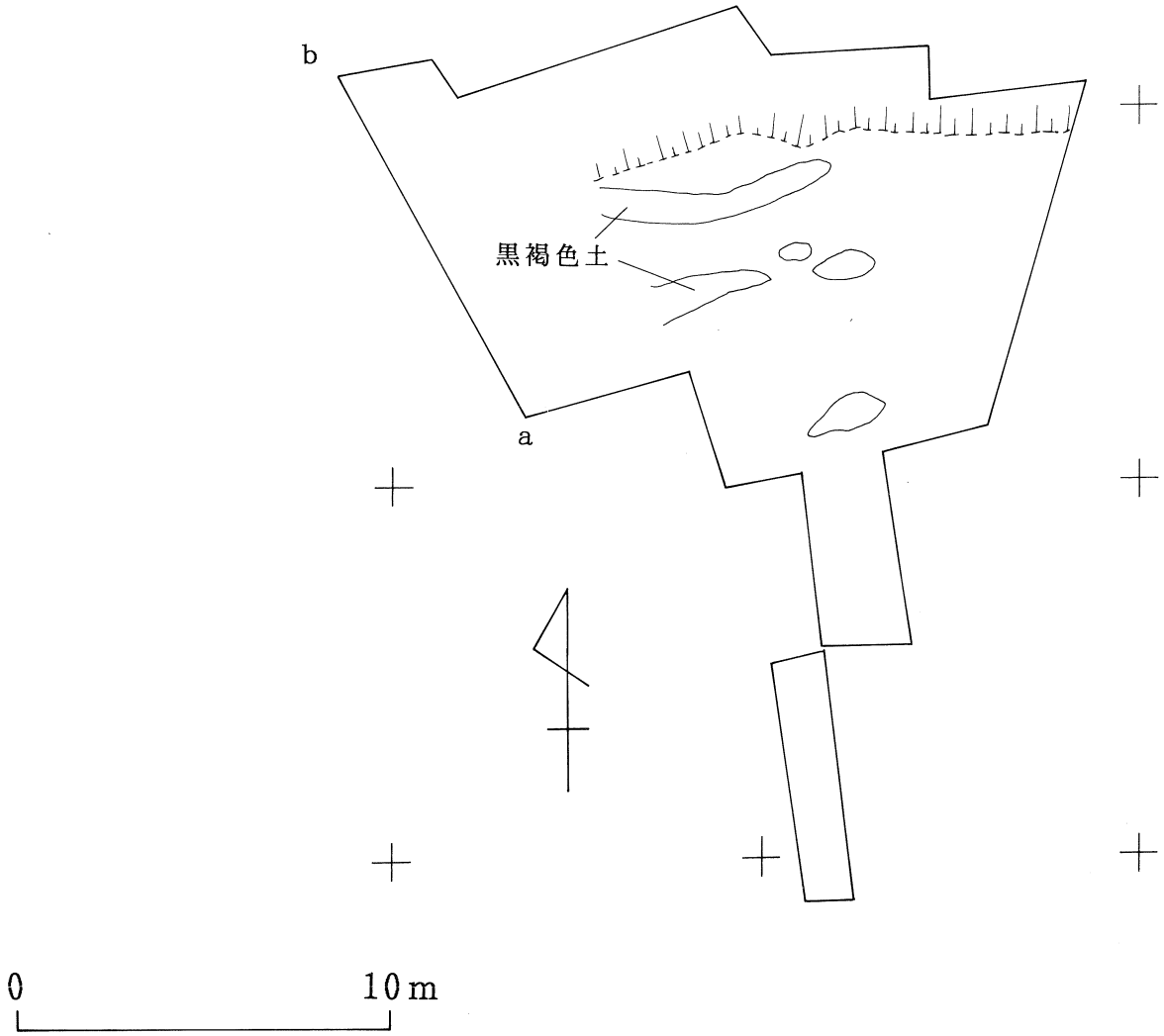
水田部の本庄川流域条里遺跡はⅠ区～Ⅲ区（b条b里32～35坪）を調査対象とした。Ⅰ区では縄文時代の土坑、Ⅱ区では古墳時代前期の住居、Ⅲ区では弥生時代中期～後期の石組遺構と中世～近世の畑状遺構を検出した。

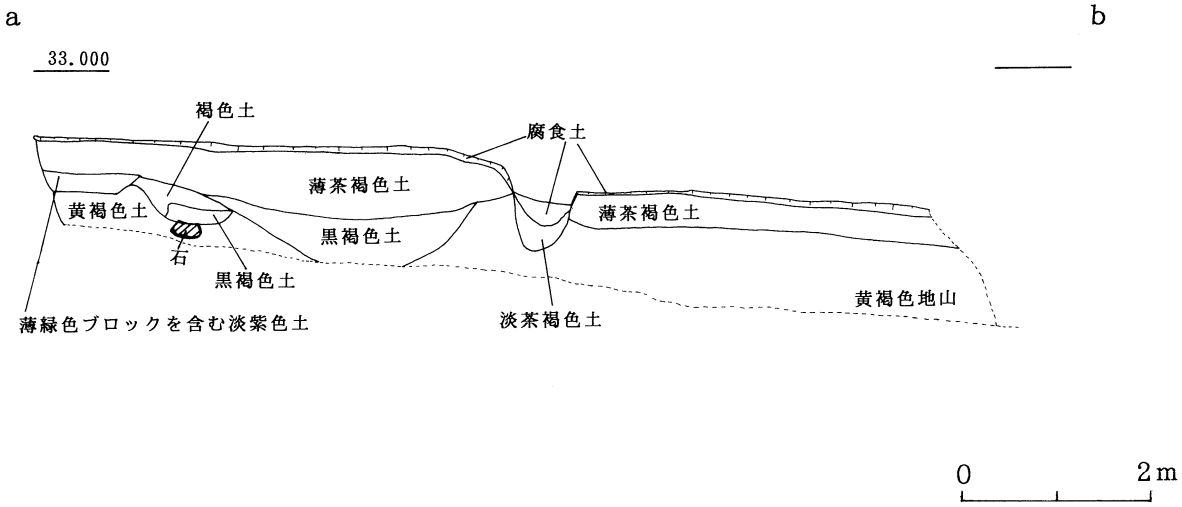
【Ⅰ区】

Ⅰ区（図版12上）では近年掘られたSD10に接して二基の縄文時代の土坑を検出した（第13図）。

SK03は〇・八×〇・六メートル、深さ一〇センチの浅い土坑（図版12下）。土坑中より黒曜石製の剥片石器が出土した。三・八×三・一センチ、厚さ〇・八センチで、剥片周縁部に若干の刃部をつくりだしている。一一・九グラムある（第14図3）。

SK04は〇・八×〇・七メートル、深さ一・〇メートルの平面が長方形の土坑（図版13）。土坑の中からは石器石材が出土した。第14図1は、六・



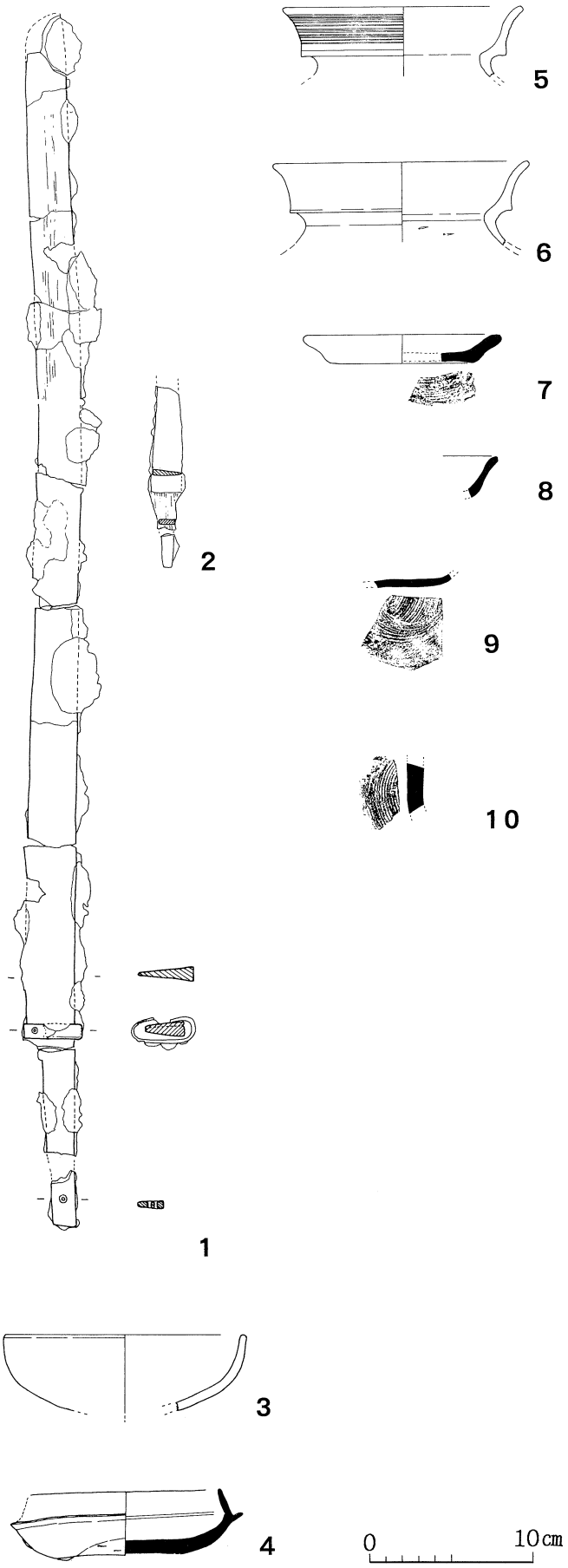


第10図　荒船遺跡調査区

九×五・三センチ、厚さ三・五センチで、一三九・五四グラムを量る。2は五・四×四・七センチ、厚さ一・二センチで、三四・二七グラムを量る。いずれも安山岩でこの他に小破片が数十点ある。SK03、SK04とも積極的な根拠を欠くが、遺物や遺跡の形態から縄文時代の土坑と考えた。

これら土坑の西側に平坦部があり、東西と南北方向に試掘溝をいれて土層の観察を行った（第12図、第13図）。その結果、①層の黄褐色土は水田造成の床土と判断され、それより下層も、人工的にもたらされた土や石の層と考えられた。それはちょうど水田造成以前にはこのあたりが狭く深い谷地形となっていることと関係している。遺物はほとんどなく、水田造成の時期は不明である。

但し、I区の耕作土からは各時代の遺物が出土した（第14図4～12）。それらは、古墳時代の須恵器（5）、円筒埴輪（4）、中国製青磁皿（8）、備前製すり鉢（9）、唐津碗（11）、近世染付（12）等である。5は横瓶の一部、4は胴部径二一・二センチ、6は口径一一・〇センチを測る。これら古墳関係の遺物は、付近の的場遺跡において円筒埴輪を出土した古墳群が松江市教育委員会によって調査されていることと関係する。[9] 7は口径一一・八センチ、器高四・八センチの土師器で平安期のものであろう。8は口唇部が輪花状となる青磁皿。



第11図　荒船古墳(1～4)、荒船遺跡(5～10) 出土遺物

【二区】

Ⅱ区（図版14）では、竪穴建物跡一、掘立柱建物跡三、溝一、土坑一を検出した（第15図）。

ＳＩ０２は調査区の西側隅に検出した竪穴建物跡で（図版15上）、既に開発や耕作等によって壁は削平され中央ピットと柱穴群のみが残るという状況であった。中央ピットは六六×五八センチ、深さ一六センチあり、これを中心に半径約三・五メートルの範囲に柱穴群が集中してみられる。建物の形態は、壁が失われているため不明であるが、柱穴から古墳時代の土器破片が出土しているので方形プランであったと思われる。

ＳＤ０９はＳＩ０２の東約五メートルにある溝状遺構である（図版15下）。長さ四・八八、幅〇・六二メートル、深さ四センチの浅い溝。ＳＩ０２との間になんら遺構が検出されなかったところをみると竪穴建物に付随した溝であった可能性があろう。また、長さや深さも検出時より規模が大きかったことが想像される。このＳＤ０９の付近で硝子製小玉が出土した（第18図12）。径二・五ミリ、〇・〇二グラムを量り、コバルトブルーを呈す。ＳＩ０２の東側に約五メートル離れてＳＢ11、ＳＢ12の二棟の掘立柱建物跡を検出した。

ＳＢ11は一×二間プランで、柱間距離はそれぞれ一・八×二・八メートルである（第17図、図版16）。ＳＢ12は一×一間のプランで柱間距離はそれぞれ二・三×三・四メートルである（第17図、図版17上）。柱穴や建物周辺からは遺物は発見されなかったが、ＳＩ０２やＳＤ０９との位置関係から、いずれもあまり時期差がない遺構と考えられる。

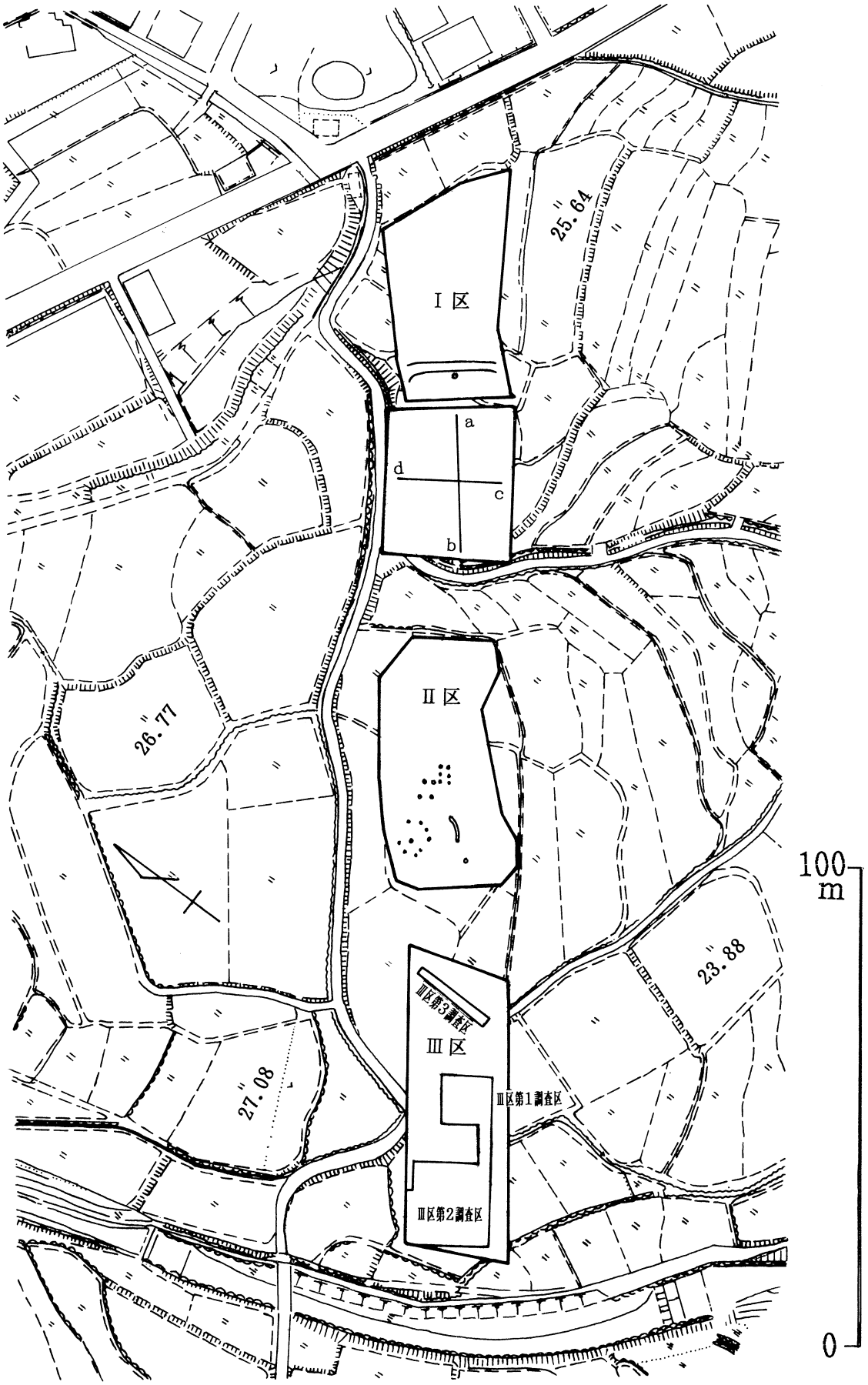
ＳＢ13は調査区の東端に検出した柱穴群の中にある掘立柱建物跡（図版17下）。平面プランは未調査区に続いており不明。柱間距離は一・八メートルで、ＳＢ11と同規模のものと思われる（第17図）。

ＳＫ０５はＳＩ０２の南約八メートルの位置で検出した平面が円形の土坑である（図版18下）。径五四センチ、深さ二〇センチを測る（第17図）。この土坑の中から土師器甕片三と高坏片一が出土した（第18図1～4、図版18上）。また覆土を水洗したところ、焼けた小動物骨片や炭化物の小破片が摘出された。第18図1、2は両方とも部分的に古墳時代前期の幾内土師器の特徴がみられる。1・2とも口径一六・〇センチで、内面頸部下をヘラ削りする。同様な土器は平成八年度調査区からも出土例がある。4は口径一五センチ。

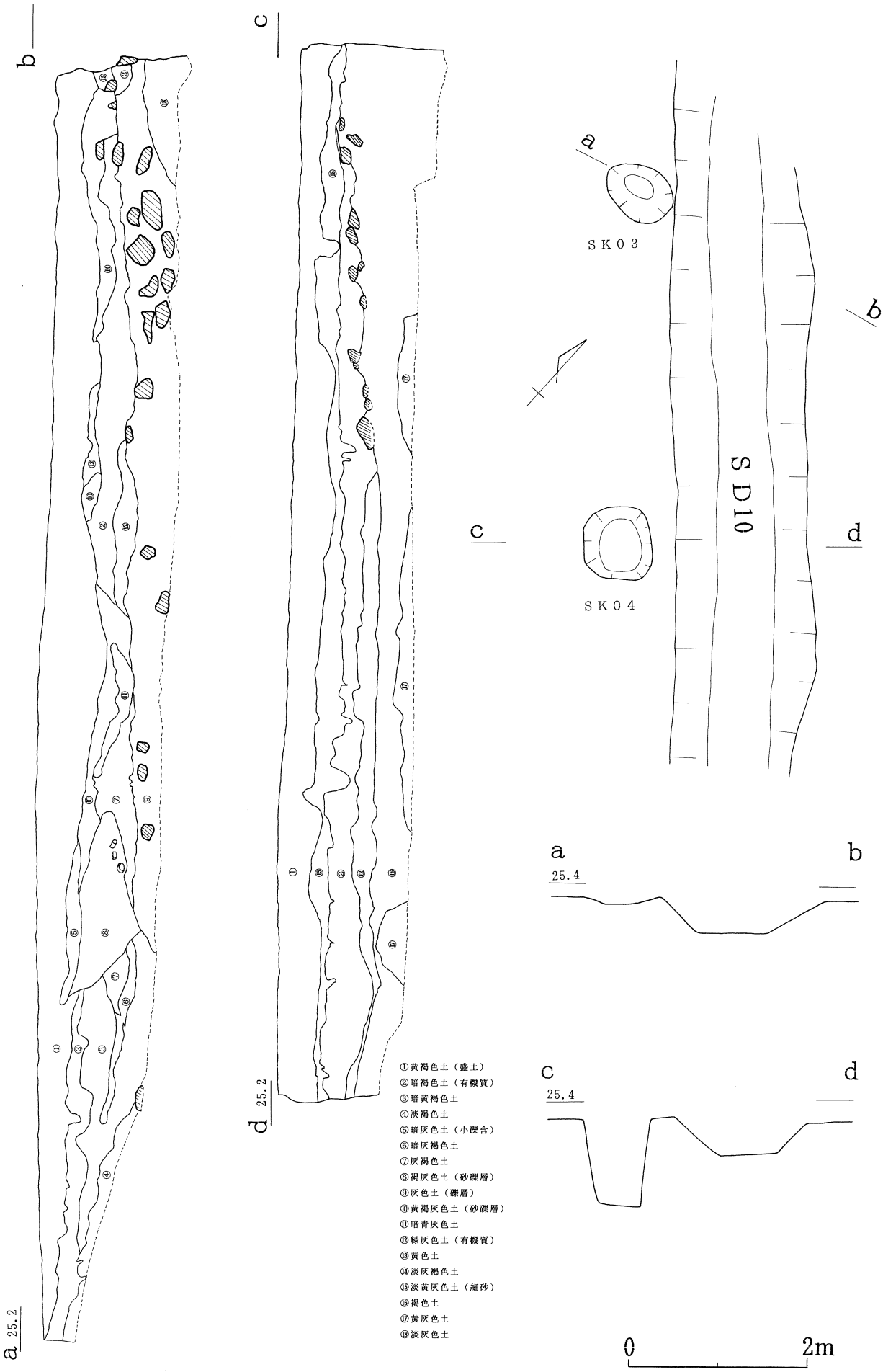
その他、耕作土中からは弥生時代から中～近世の遺物が出土した（第18図5～14）。5は石皿様石器片で二六・〇×一五・〇センチ、厚さ六・二センチあり、表裏に使用痕と炭化物の付着痕が観察される。重量は三四〇〇グラムを量る。ＳＩ０２の関係遺物の可能性がある。6は備前製摺鉢、7は天目碗、8は唐津の碗、9は長さ五・〇センチの煙管、13は径一・一センチの鉛製鉄砲玉（七・八五グラム）、14は土錘の1／3残存片で長さ二・九センチ、二・四九グラム。15は寛永通宝で二・二六グラム。10は黒曜石製鏃で長さ二・八センチで、一・七グラム、11は安山岩製石鏃で三・四センチで一・五六グラムを量る。11は弥生時代のものであろう。

【三区】

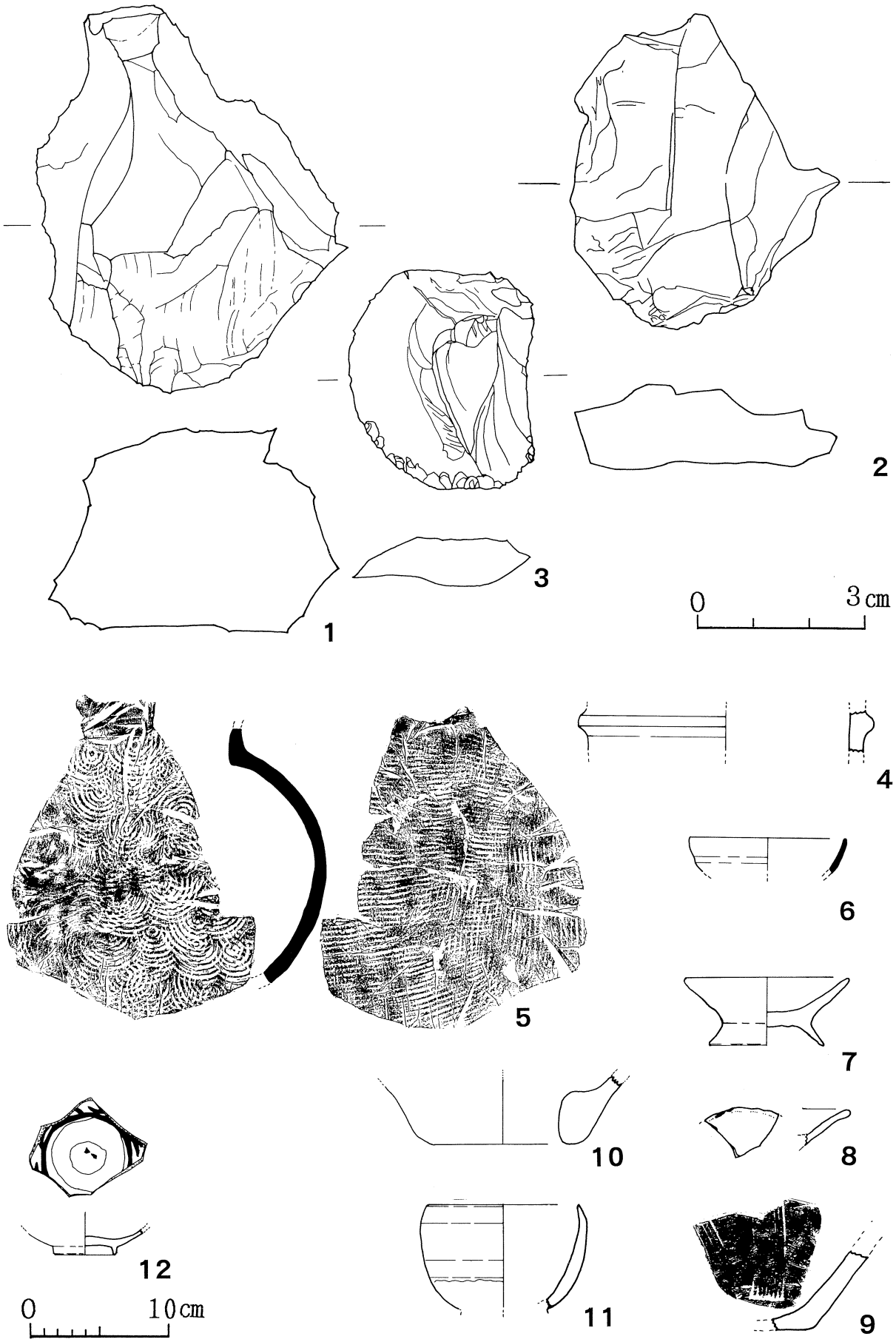
Ⅲ区では便宜上第1調査区、第2調査区、第3調査区に区分けして調査を行った（第12図）。



第12図　本庄川流域条里遺跡調査区



第13図　Ⅰ区 遺構実測図

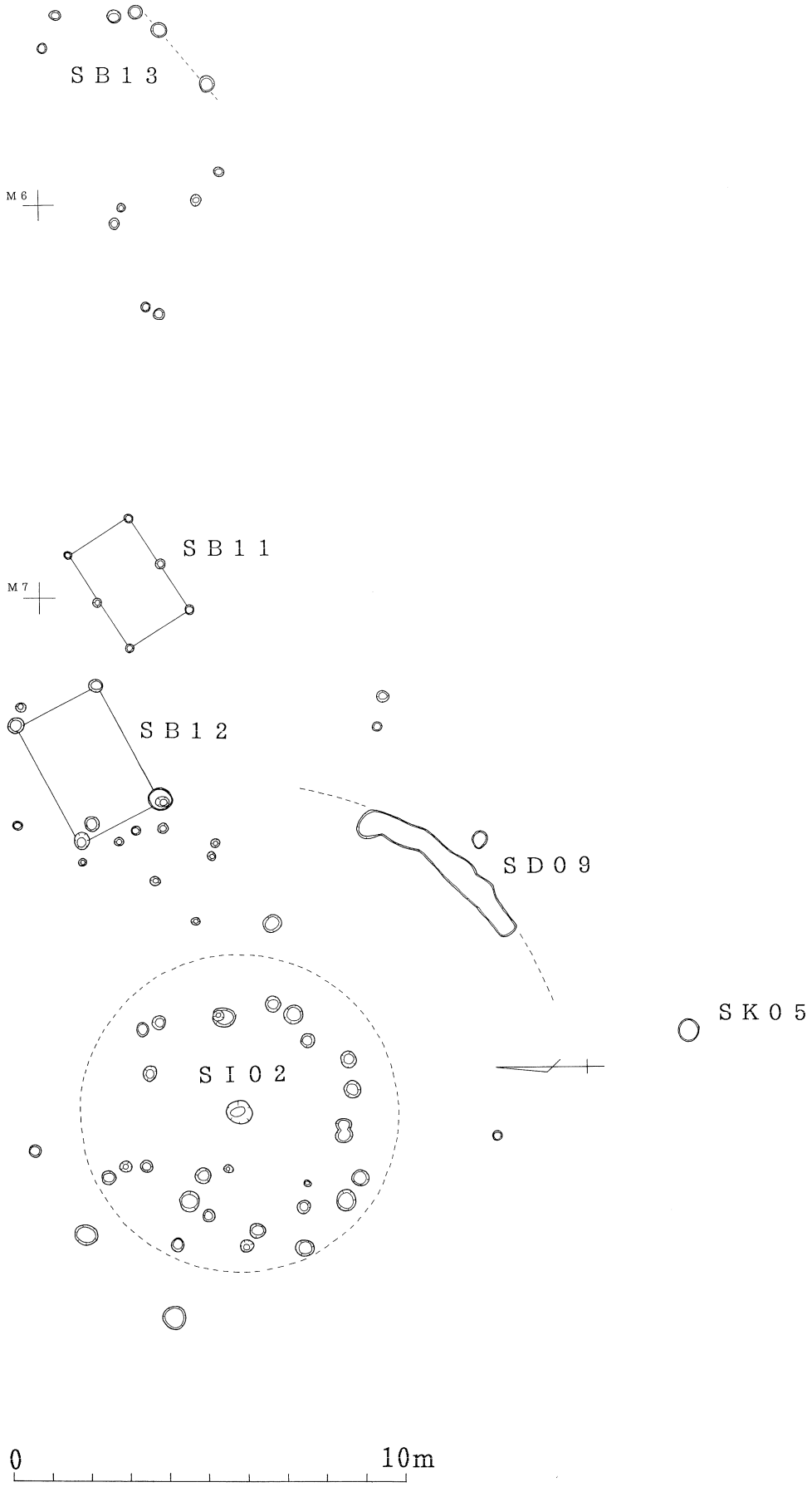


第14図　Ⅰ区 出土遺物

第1調査区（図版19上）は、水田耕作が放棄された後にアシ・ヨシ類が繁茂し、かつてはいわゆる深田であったことが推定された。この第1調査区は大別して、上層は中世～近世、下層は弥生時代中期・後期の層序となっている。その境は④層と⑤層との間である（第19図）。上層部では遺構はなかったが、黒曜石破片、須恵器（第20図39、44）、土師器、中・近世陶磁器の小破片とともに、木製品が出土した（第22図）。下層部では弥生時代の旧河道もしくは池の岸を人頭大前後の石で護岸した石組遺構（ＳＲ０１）を検出した（第19図、図版19下、図版20上）。それはほぼ南北方向に奔っており、緩やかな北高南低を呈して、南側は本庄川方向に向かっている。また、東西方向の断面は、第19図ａ—ｂ壁（図版21上）の層序で明らかなように、石組状遺構を境にその西側が深くなっている。川、もしくは池はこの石組状遺構の西側である。対応する⑤層以下の層からは、主として弥生時代中期後半から後期の土器（第20図）、黒曜石、木製品（第21図）、植物遺体が出土した。土器の中には弥生時代前期のものが若干含まれる（第20図1～4）。表土からは古墳時代から中・近世の遺物が出土した（第23図）。このような石組状遺構は、松江市西川津町西川津遺跡の弥生時代前期～後期の遺跡でも調査されており[10]共通した河川、または湖沼利用法があったことが知られる。

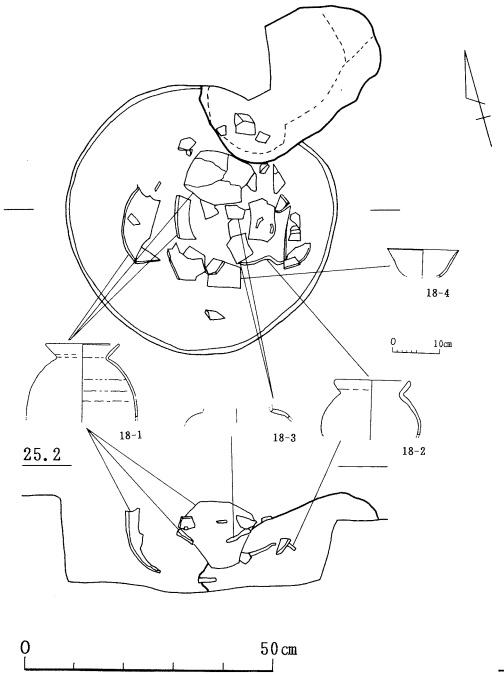
第20図は第1調査区内出土の土器である。1は弥生前期の甕型土器片、2は口径一二・〇センチの壷である。頸部に一条のヘラ描き沈線がはいる。5、6、17、47は口縁部に横線紋を施す壷型土器である。5は復元口径二七・〇センチ、17は口径八・四センチの小形壷であろう。6は口径一九・〇センチで頸部が長くなる。胎土や焼成・器面調整ばかりでなく、大きさも47に接合されてもよい資料である。47の内面は指圧痕とタテ・ヨコ方向にナデがみられ、削りはない。7～16、18～30は甕型土器で、口径が、一五センチ前後のものと（7～9、11～16、18～20、25～28）、一九センチ前後のもの（10、21～24、29、30）に大別でき、内面頸部から下方をヘラ削りするのは、どちらかといえば大形のものに多い。33～38、40はこれらと同時期の高坏である。33は口径一四・三センチ、34は一四・〇センチ、35は一五・八センチある。このうち、34、35、38の外面にはヘラミガキの後に赤色顔料の塗布がみられる。

第21図は下層出土の木製品である。多くは二次的に加工され杭に再利用されていた。19～28は建築部材の一群と考えた。19は長さ一六九・〇センチ、幅五・〇センチ、厚さ三・〇センチある。このうち、20、22、23には方形の小孔がみられる。22の小孔の一つは側面にぬけている。20は長さ一二五・〇センチ、幅一二・八センチ、厚さ三・五センチある。21は長さ一二七・二センチ、幅一七・八センチ、厚さ四・三センチある。23は長さ六三・四センチ、幅一〇・六センチ、厚さ二・八センチある。これら20、22、23は互いによく似ており同じ構造物の部材であろう。24は長さ六三・四センチ、幅三・一センチ、厚さ二・六センチあり、一方の端近くに抉りがある。25は長さ二九・八センチ、幅三・九センチ、厚さ六・二センチある、一辺に段を作る。26は長さ五四・八センチ、幅三・〇センチ、厚さ二・一センチ。27は長さ四二・二センチ、幅二・五センチ、厚さ一・八センチで、断面は楕円形である。28は長さ四六・三センチ、幅三・八センチ、厚さ二・七センチで石組状遺構に杭として使用されていたもの。32・33は板状の木製品を再加工したものである。それぞれ長さ二一・六セントと二八・六センチある。34は長さ四六センチ、幅七センチで、長辺の一方に抉りのある不明木製品。

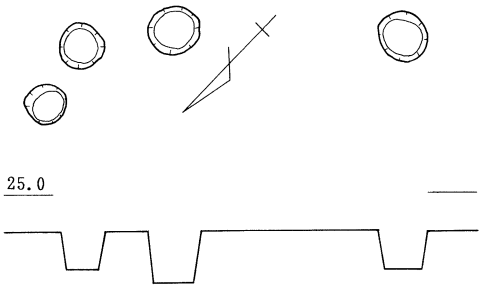


第15図　II区 遺構配置図

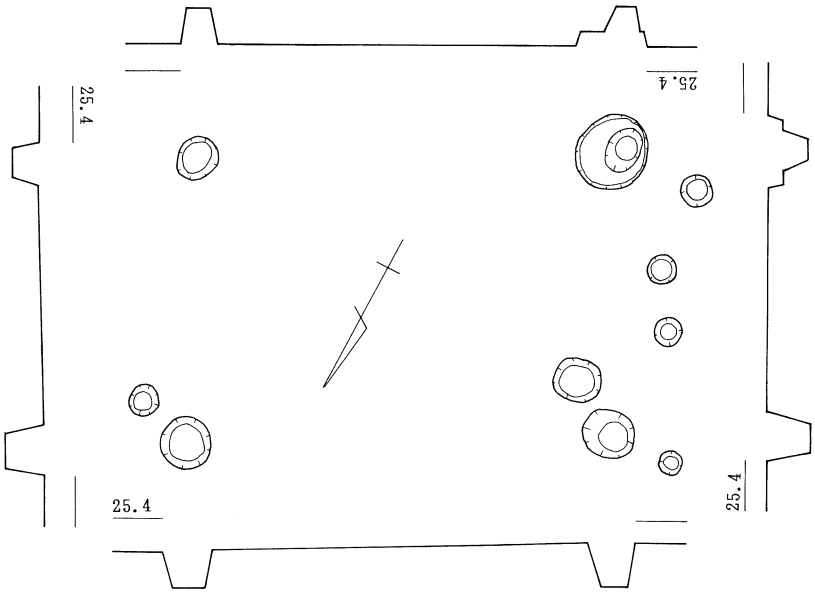
第16図　II区 SI02・SD09実測図



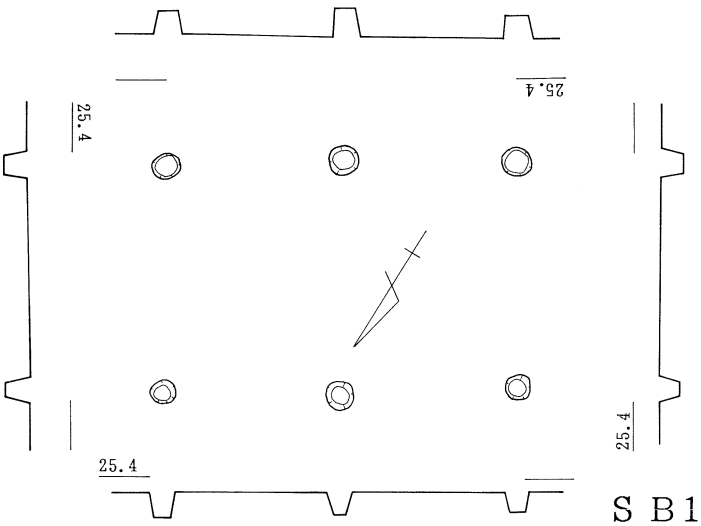
SK05



SB13



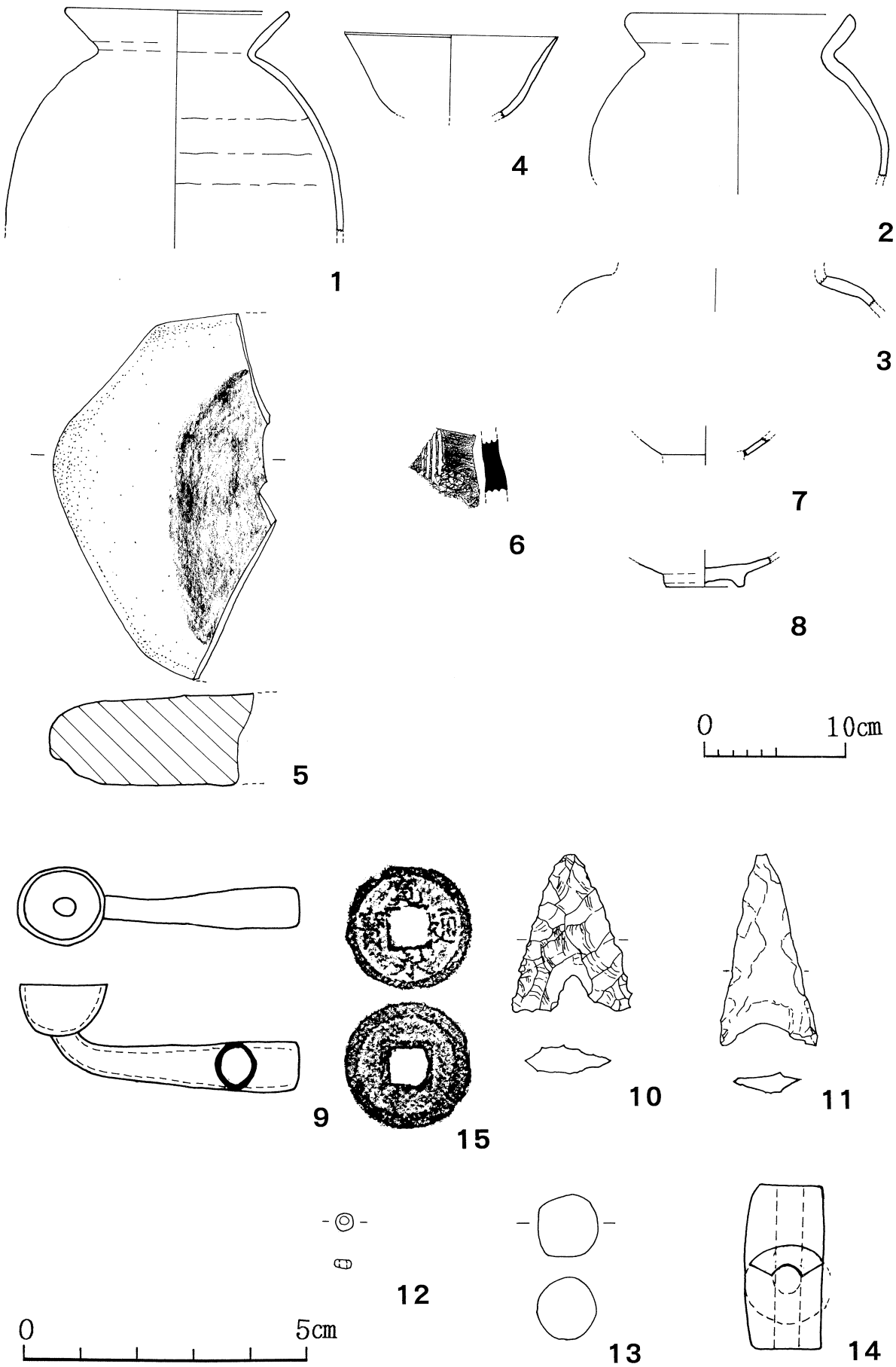
SB12



SB11

0 2m

第17図　II区 遺構実測図



第18図　II区 出土遺物

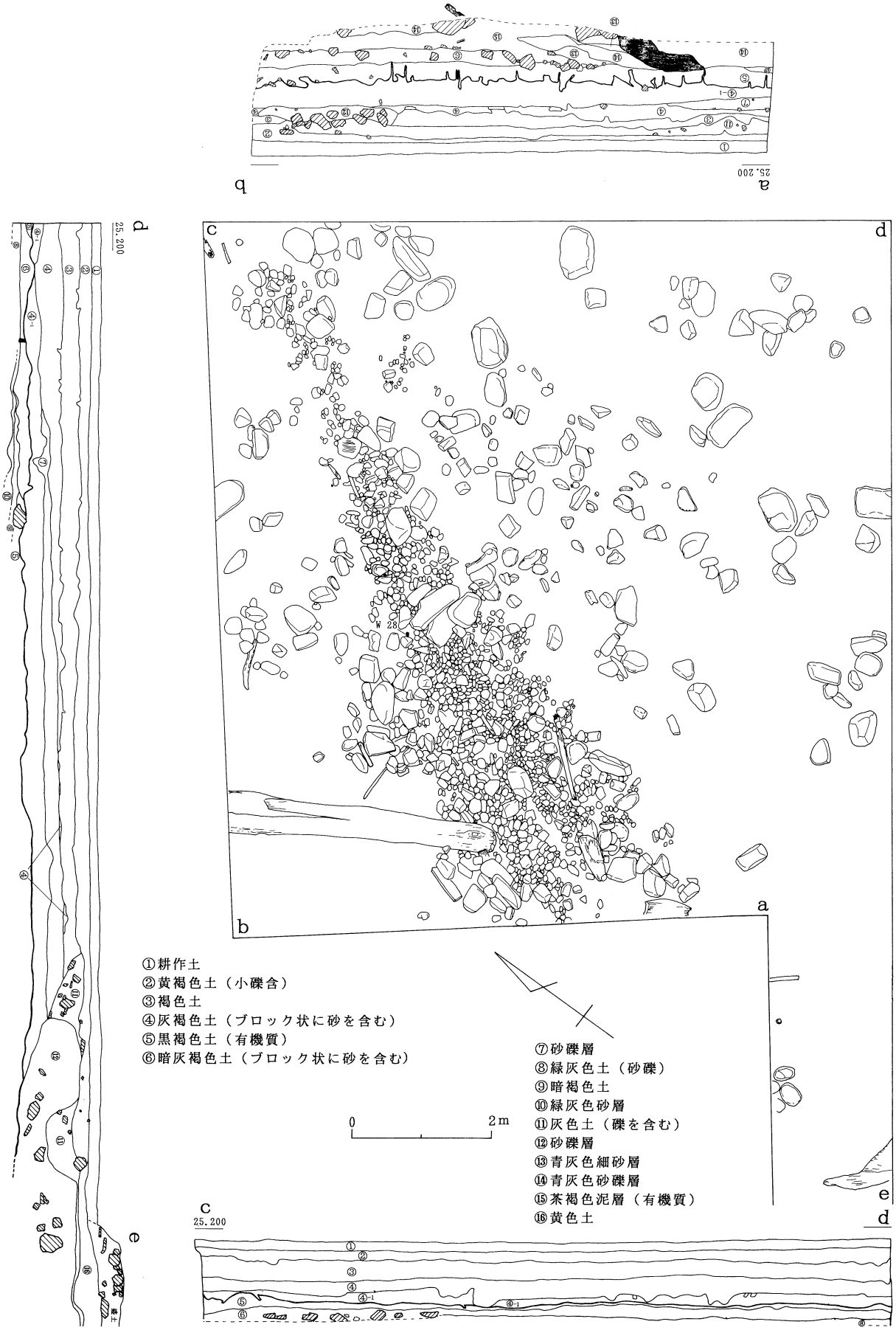
31、35～41は農耕具類の一群である。31は二二・六×一五・二センチ、厚さ一・二センチある。35は長さ二〇・四センチ、幅九・三センチ、厚さ一・七センチある。36は加工途中のもの。一方の面の中央から周辺に向けて加工が見られるので、丸鍬の未製品であろう。長さ五二・二センチ、幅二〇・二センチ、厚さ三・八センチある。37は鍬の破損品。復元すれば長さ三〇センチほどになろう。38は茄子型鋤先の一部で、カシ類を材としている。現存する長さ三四・五センチ、幅二・六センチ、厚さ一・四センチある。31は小孔があるが材は鋤鍬類にみられるカシ類ではなく、容器の蓋かもしれない。39は一〇・二×七・一センチ、厚さ一・四センチで、38の一部と思われる。

29、30は箱状のもの。29は現存する長さ四一・八センチ、幅一二・五センチ、厚さ一・〇センチある。30は長さ二四・三センチを測る。29には外面に紋様を施している。紋様は接近して二ケ所にある。中央のものは重角紋を二つ並べ、一見すると雷紋のようにみえる。紋様帯は長さ七・二センチ、幅四・〇センチある。その右にあるのは施紋途中で中止したようで紋様として完成していない。この紋様は大原郡加茂町加茂岩倉遺跡出土銅鐸群のうち、袈裟襷紋銅鐸の一〇と三五号銅鐸の重角紋に酷似していることが注目される。[11] 紋様があることを重視すれば琴のような楽器も想定される。

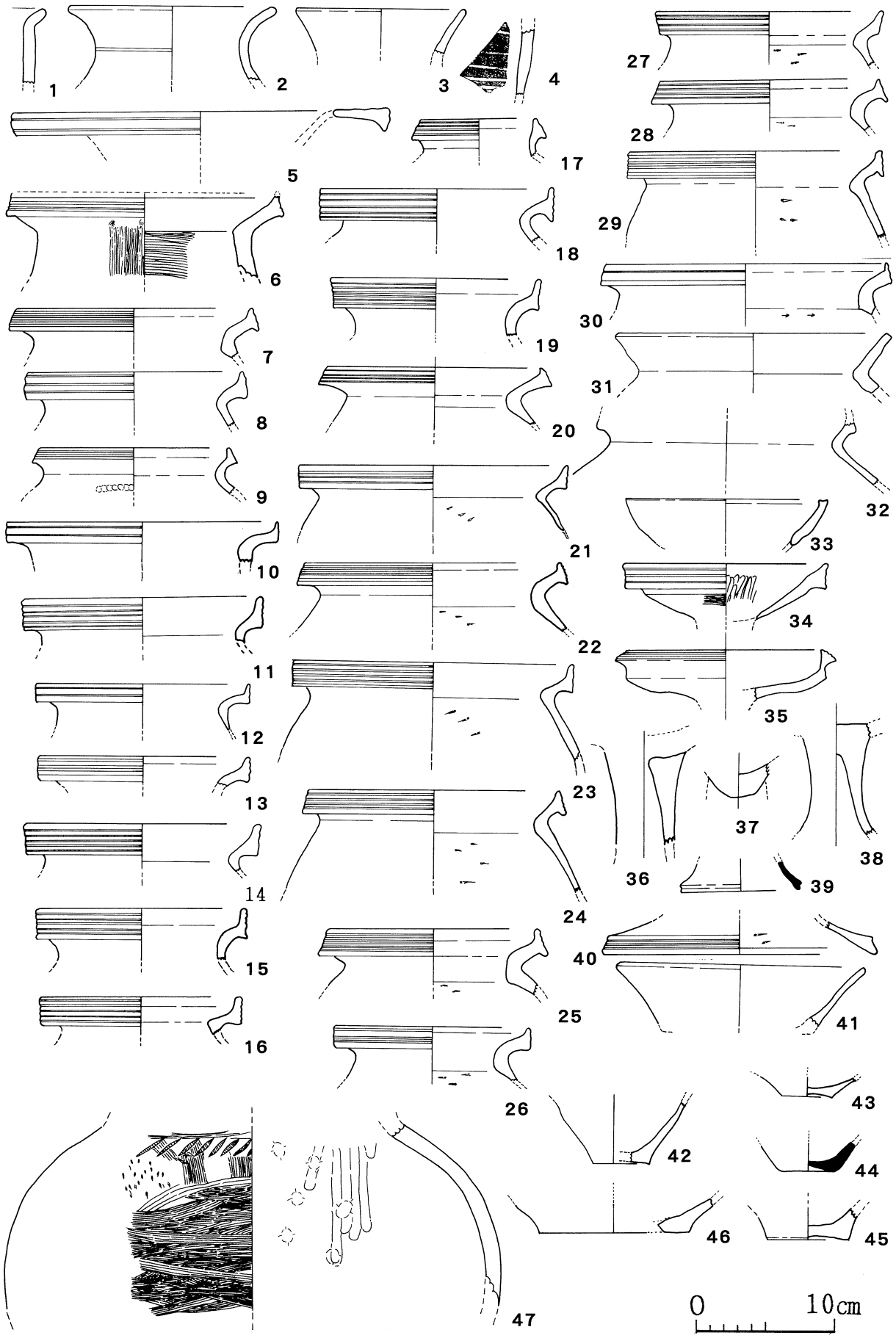
なお、第19図、図版21下、図版22にあるSR01に接して横たわる径五〇センチほどの木は、木製容器を製作するのに適した材質であり、水中貯木されたと考えられるものである。端部に斧痕が認められた。同様な例は西川津遺跡の弥生時代前期にある。[12]

第22図は上層出土の木製品である。いずれも廃棄された状態で出土し、完形になるものはない。このうち、3、4、7、8、13は大足の部品であろう。1、2、5、6は大型の不明木製品。廃棄される以前に再加工されており二次的に使用されたと思われる。3は長さ五四・七センチ、幅四・一センチ、厚さ三・〇センチで、両端部を欠く。そのうちの一方は削りを施しており杭に転用されたものであろう。貫通する方形の穴は六ケ所確認できる。4は3と同様であるが保存状態はよくない。3と4は対になるものと判断される。7と8は台形の板状を呈し、それぞれ、7は長さ二九・九センチ、幅五・四センチ、厚さ一・八センチ、8は長さ三四・六センチ、幅五・八センチ、厚さ一・一センチある。13は長さ一七・八センチ、幅二・四センチ、厚さ〇・七センチを測る。1は長さ一・三三メートル、幅〇・二四メートル、厚さ二センチで、両端は幅が狭くなり、孔がある。2は長さ一一三・四センチ、幅五・八センチ、厚さ二・〇センチを測り、細長い板状のものである。一方は削りを施し尖らせている。元は幅の広い板状のものであったと思われる。5は現存する長さ九一・八センチ、幅八・〇センチ、厚さ四・八センチある。三ケ所の孔がみられるが、かなり消耗されており、元は一一・四×三・四センチの長方形の孔であったと思われる。梯子の可能性が考えられる。6は長さ六二・二センチ、幅一一・〇センチ、厚さ二・四センチの板状の木製品である。一端は破損しているが、反対側の端はV字状に加工され、方形の小孔がある。9は太刀鞘の一片で両端を丸く再加工している。長さは一三センチ、幅は三・一センチある。

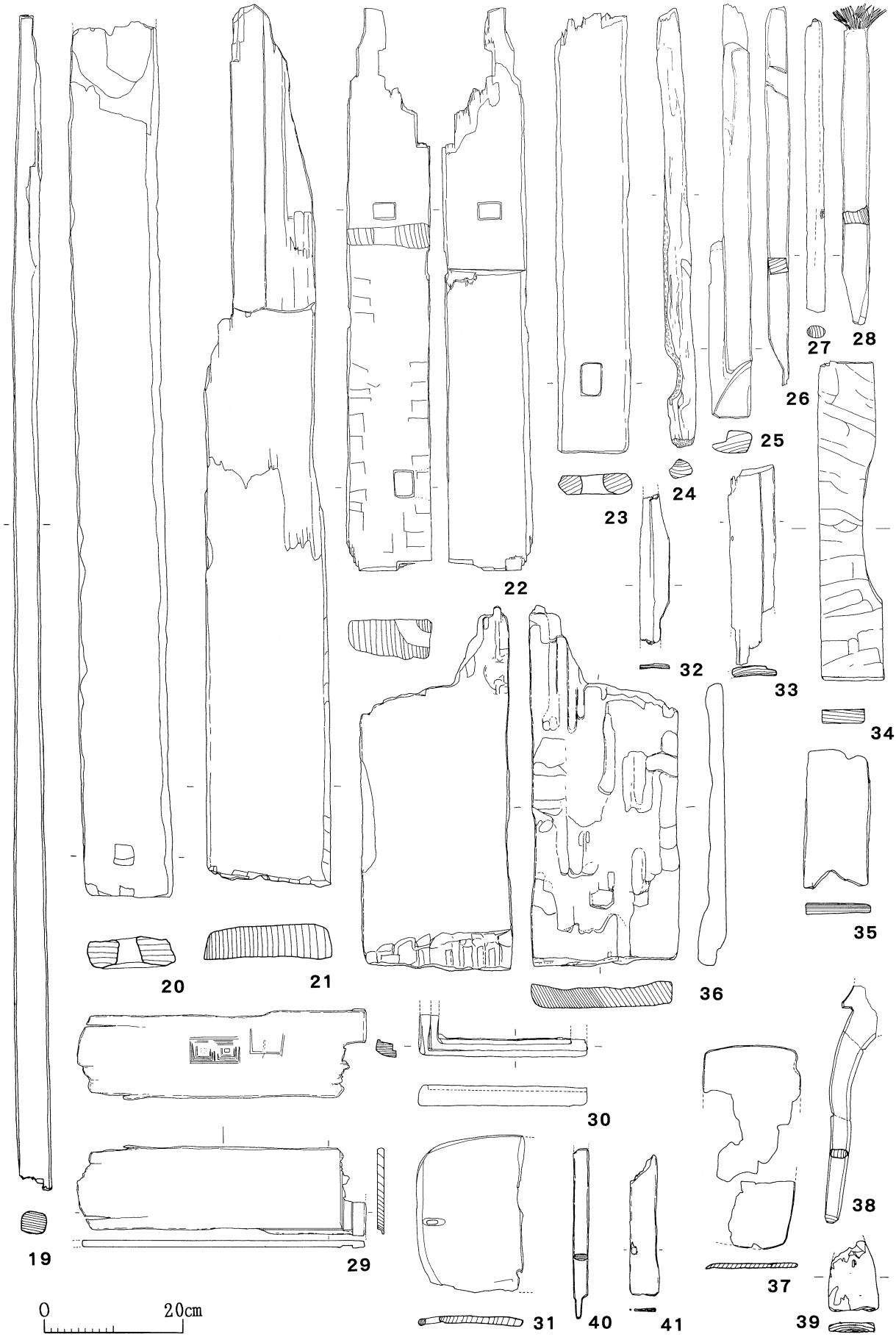
10、11、12は材質や形態は異なるが中ほどがくびれるという共通点がある。10・11はツチノコの可能性がある。10は長さ一一・八センチ、幅三・四センチである。11は長さ一一・六センチ、幅三・四センチ、厚さ一・一センチある完形品。樹皮を材としている。12は厚さ二・五センチある。14、15は箸状



第19図　III区 SR01実測図



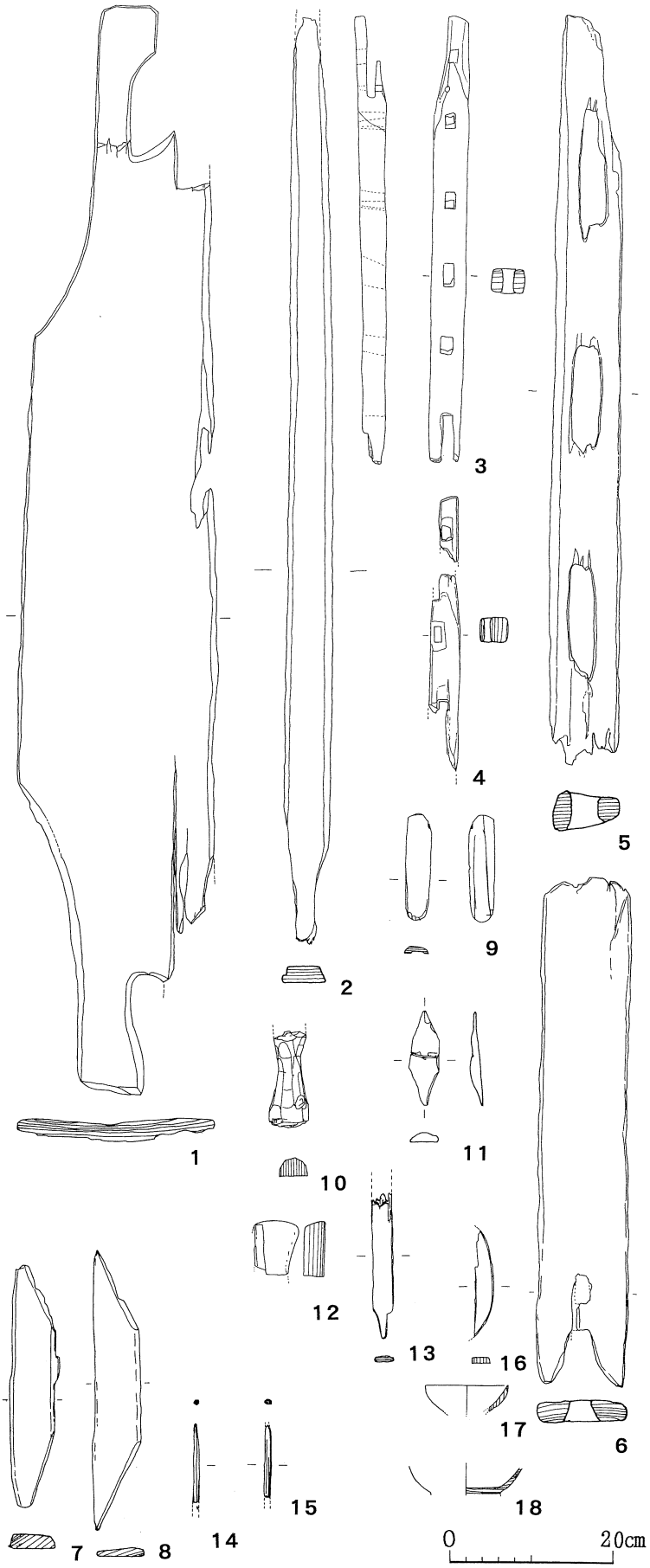
第20図　Ⅲ区 出土遺物(1)



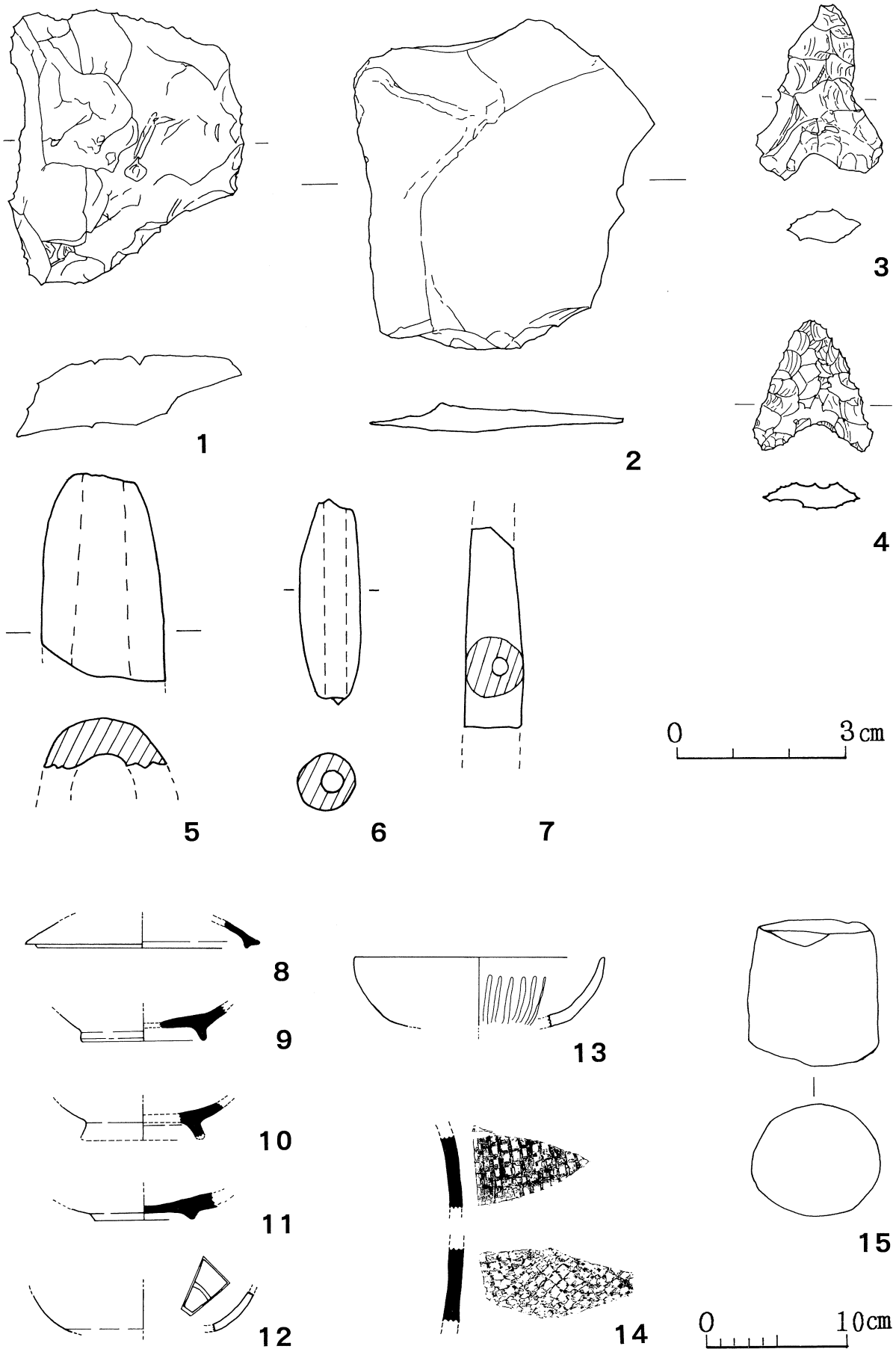
第21図　III区 出土遺物(2)

のもの。それぞれ、長さ九・八センチと八・八センチある。16は曲物の底蓋で厚さ〇・七センチある。17、18は漆塗り椀である。17は口径一〇・〇センチほどに復元され、風化がすすんでおり保存状態は悪いが、外面には赤漆の痕跡が認められる。18は高台付椀で、内外面に黒漆が塗られる。これ以外にも写真図版22―19が出土した。黒漆の上から赤漆で紋様が描かれている。

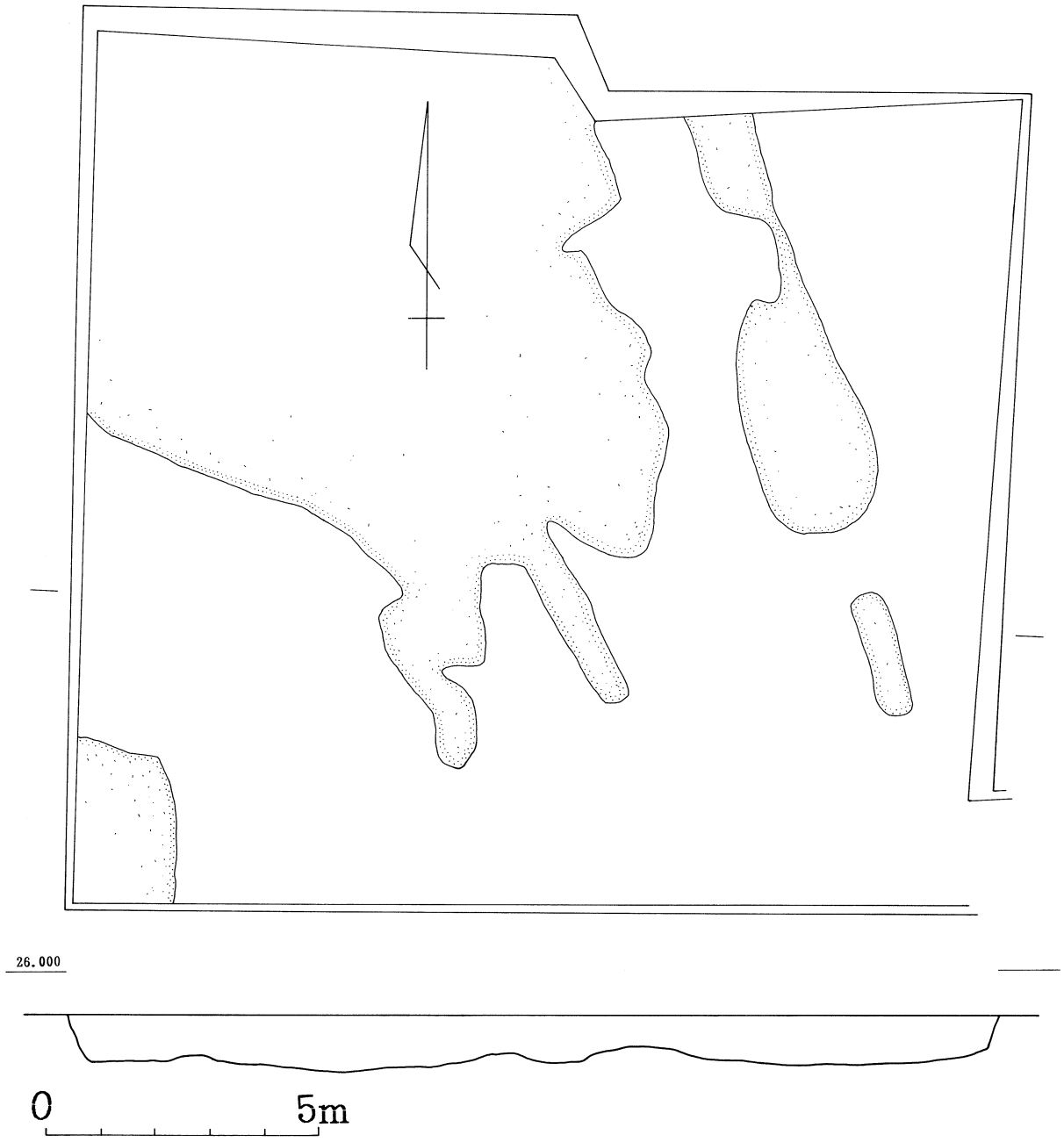
第23図は第1調査区出土の石器、及び上層と表土から出土の遺物である。1は下層の石組遺構の中に混在していたもので、四・七×四・〇センチ、厚さ一・一センチの玉髄の剥片である。重量は三三・八一グラムを量る。2は上層に混在していたサヌカイトの剥片である。五・八×四・五センチ、厚さ〇・四五センチで一五・〇〇グラムを量る。15も下層の石組遺構の中に混在していた円柱状の石で、長さ一〇センチ、径九・〇センチ、重量は一二七一・二七グラムを量る。石器石材の可能性があるので掲げておく。3は長さ三・一センチ、厚さ〇・五センチの黒曜石製石鏃である。二・六一グラムある。4は長さ二・三センチ、厚さ〇・四センチの黒曜石製石鏃である。一・五四グラムある。5～7は土錘である。5は中型サイズの土錘で、現長三・六センチ、径二・三センチあるが、元は長さ六センチほどであったと思われる。



第22図　Ⅲ区 出土遺物(3)



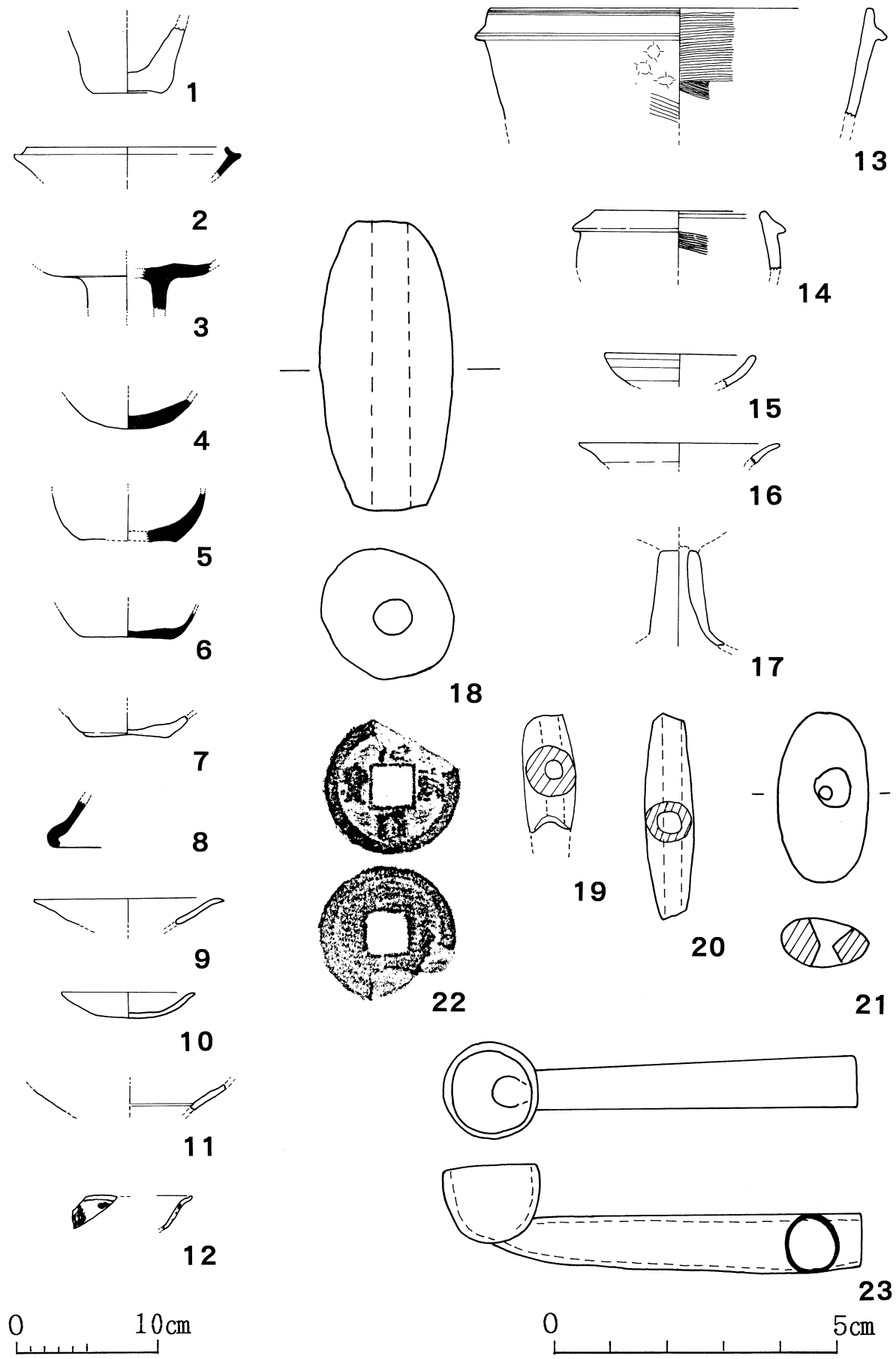
第23図　Ⅲ区 出土遺物(4)



第24図　Ⅲ区 Ⅲ区 第２調査区

破片での重量は六・九グラムある。6は長さ三・六センチ、径一・〇センチ、重量三・二五グラムある。7は一部を欠くが、現長三・五センチ、径一・〇センチ、重量三・五四グラムを量る。いずれも形態は異なるが、胎土は緻密で、中世以降の刺網の沈子である。8～11は上層出土の律令期の須恵器である。8は最大径一四・八センチの内面にかえしのある蓋。9～11は高台付の椀型坏で、外面底部に回転糸切痕がある。13、14も上層の出土である。13は口径一七・六センチの古墳時代の土師器坏である。内面には放射状の暗紋がある。14は外面に格子状の叩き痕のある陶器である。

第2調査区はほとんど大小の石のみの層が厚く体積しており、その西側は本庄川に接している。表土はこれらの瓦礫層の上に薄く盛土した状態の耕作土である。耕作土の下の瓦礫層を一メートルほど掘り下げたところで、北西から南東に向かう三ケ所の微砂粒を含む粘土層が検出された（第24図）。この粘土層は薄いところで三センチ、厚いところで二〇センチあり、瓦礫層に挟まれ



第25図　Ⅲ区 出土遺物(5)

るかたちとなっている。瓦礫層の中からは弥生土器、須恵器、土師器、中・近世遺物が出土した（第25図）。この粘土層は第1調査区や第3調査区の中・近世層とほぼ高さが等しいので、そのころの水田か畑の耕作土と考えられる。

第3調査区は第1調査区の東側に南北一七メートル、幅二メートルの調査区を設定した。その結果、遺構は検出できなかったが、土層内からは弥生時代〜中・近世遺物が出土した。また、周辺からもほぼ同様な遺物が出土した（第25図）。

第25図1は弥生土器の底部である。2、3、4、8は古墳時代の須恵器である。2は口径一三・八センチある。3は高坏。4は小型化した蓋坏。8は2〜4に先行する高坏の脚部で、その端部は内側に巻くかたちとなっている。同様な資料は平成八年度調査区でも出土している。17は古墳時代の土師器である。高坏の脚部で現存部は六・七センチある。5・6は律令期の須恵器の坏である。無高台で外面底部に糸切痕がある。7、9、10は中・近世の土師質土器である。10は口径九・二センチ、器高一・八センチある。11は一二〜一三世紀ごろの中国製白磁片、12は一六世紀ごろの中国製染付で、割れ口に漆の付着がある。13、14は瓦質土器である。13は口径二六・八センチ、最大径は二九・〇センチに復元される。内外面とも指頭圧痕とハケ目調整痕がみられる。14は胎土、焼成、調整が13に同じであるが、口径一一・八センチ、最大径一五・〇センチと小型である。口縁部は内傾する。

18〜20は土錘である。18は長さ五・一センチ、径二・三センチと中型の土錘で、重量は二五・三一グラムを量る完形品である。19は一部を欠くが、現存する長さ二・〇センチ、径〇・九センチで、一・三一グラムある。20は長さ三・五センチ、径〇・九センチの完形品で、一・七三グラムある。いずれも、刺網の沈子であるが、18はいわゆるマス網の道網の沈子の可能性もある。21は淡緑色の石製の垂飾と考えられるものである。長さ三・〇センチ、幅一・六センチ、厚さ〇・九センチある。中央に両面穿孔した小孔がある。重量は五・四一グラムを量る。縄文時代のものと思われる。島根県内では匹見町水田ノ上A遺跡に類例がある。[13] 22は文字は判読できないが宗銭で、一・八六グラムある。23は長さ七・一センチ、重量一四・七八グラムを量る煙管。

総じてⅢ区では、弥生時代後期までは自然地形に規制された土地利用であったのに対し、中世〜近世には積極的に可耕地開発が行われてきたと推定される。

注

1、内田律雄・大谷正徳・松沢亜生「島根・松江市新庄町新川発見のルヴァロア型尖頭器」『旧石器考古学』四六　一九九三

2、本庄川流域にのこる条里以降の仮坪付番号による。岩本次郎「本庄川流域平野部の条里プランについて」『本庄川流域条里遺跡』島根県教育委員会　一九九七

3、有舌尖頭器、松江市教育委員会調査。

4、内田律雄『本庄川流域条里遺跡』島根県教育委員会　一九九七

5、内田律雄『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書（海崎地区1）』Ⅲ　一九八七

6、岡崎雄二郎・原田律夫・松本岩雄「出雲国における同笵鏡の新例—島根県八日山一号墳をめぐる二・三の問題—」『考古学雑誌』第六十三巻　第

四号　一九九八

7、圃場整備中に出土。

8、圃場整備中に出土。

9、『松江北東部遺跡発掘調査概報―本庄川流域条里制遺跡・的場遺跡―』松江市教育委員会　一九九〇

10、内田律雄『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書（海崎地区3）』Ⅴ　一九八九

11、島根県埋蔵文化財調査センターで実見。

12、注10。

13、渡辺友千代『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会　一九九一

第三章　本庄川流域の石塔等

今岡　稔

平成九年度調査の石塔等の報告をする。

一、川部（かわべ）福田寺阿弥陀堂の石塔・石仏（上本庄町川部）

1石仏　石質は来待石に似ているが、来待石ではないようだ。肩の所から欠損して頭部は無い。現存部分も胴の中程から二つに割れている。衣紋と、足先の彫出が見える。外縁分下部には蓮の花、左側には四字程度の字が見える。下二字は「二日」とも読めるが「吉日」かもしれない。

2宝篋印塔笠部　上部のほぞ穴は円形。来待石に似た石質だが来待石より堅そうな石で、割れ方も来待石とは違うようだ。底部には、ほぞもほぞ穴も見えない。

3宝篋印塔笠部　上部のほぞ穴は四角形。下部の段のカーブが特徴的である。時期的にも、この種類のものの時期はかなり限定されているのではないかと見当をつけているが、正確な年代は不明である。これも来待石に似た凝灰岩質のものである。

4宝篋印塔基礎部　中は埋納のためか大きく穿たれている。ノミ痕は、穴の底は粗く残り、側面はさほどでもない。石質は1～3と同様である。

5五輪塔水輪部　4の上に乗せてある。石質は1～4と同様と見える。

以上の石塔・石仏が阿弥陀堂の横に安置されている。詳しい年代はわからないが、十六世紀後半から十七世紀にかけてのものではないだろうか。

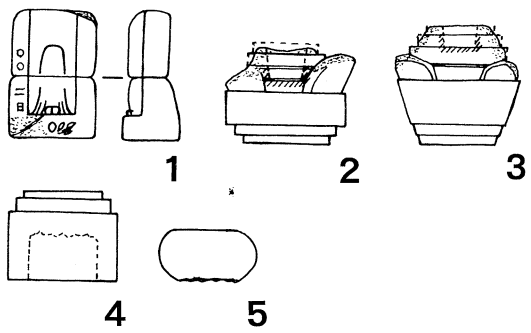
二、横枕橋付近の石仏（上本庄町）

今は耕地整備事業のために北へ何十メートルか移動されているが、元は横枕橋のたもとにあったという。弘化二年（一八四五）と紀年の彫られた石祠に入っている石仏は、左手に宝珠を持っているのでお地蔵様だろうか。石祠も石仏も来待石製である。石仏の台座も来待石かもしれない。石祠下の台石も元々は来待石だったと思うが、今は来待石よりずっと堅い質の自然石である。石祠横の石仏も堅い質の石に彫られたものである。

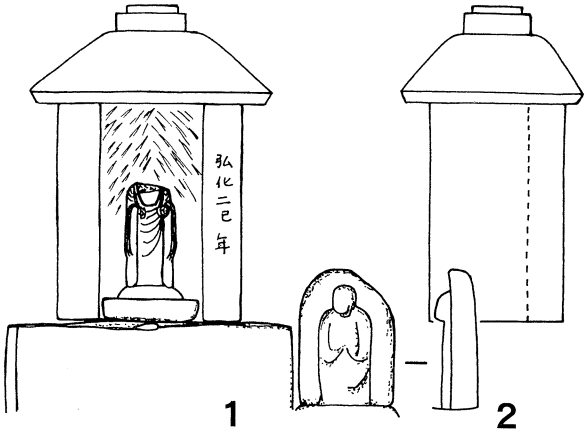
石祠は屋根の上の宝珠が欠損している。屋根の直上の段は四角で、その上の段は円形である。

三、木並（きなみ）の石仏・木仏（上本庄町木並）

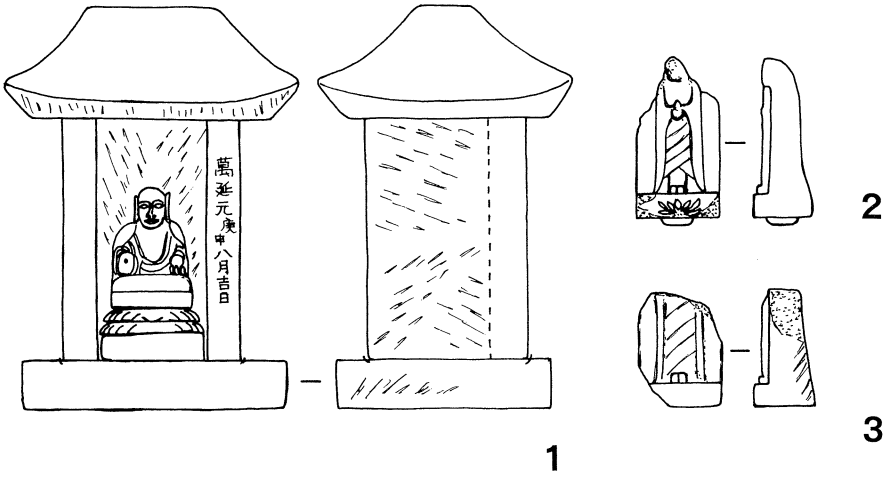
石祠には萬延元年（一八六〇）の紀年が彫られ、中に木仏が安置されている。台座（？）二枚も木製である。木仏の右手は欠けている。石祠は来待石製で、台石には浅い彫り込みがあって、上の壁部分を受けるようになっている。



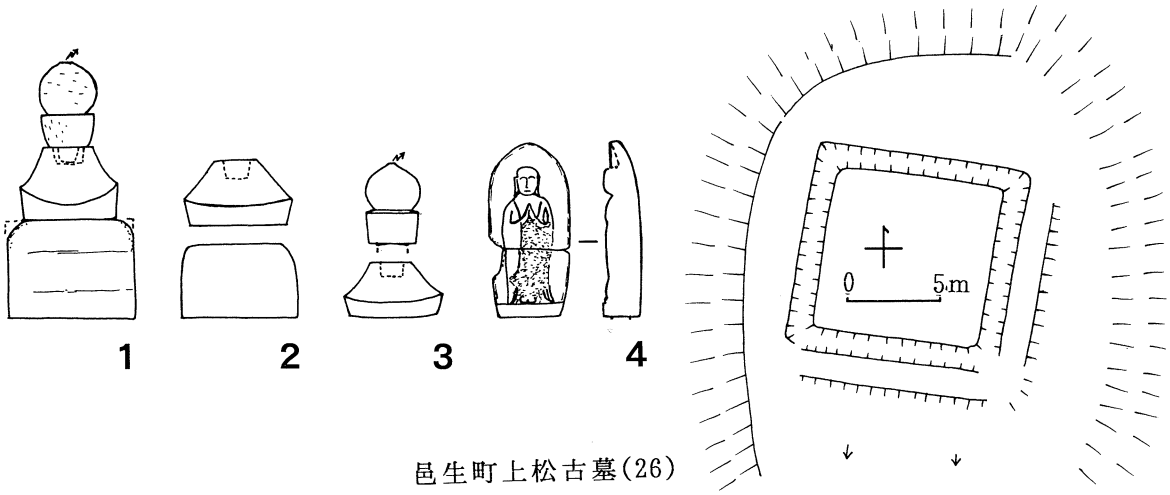
上本庄町福田寺阿弥陀堂(30)



上本庄町横枕橋付近(28)



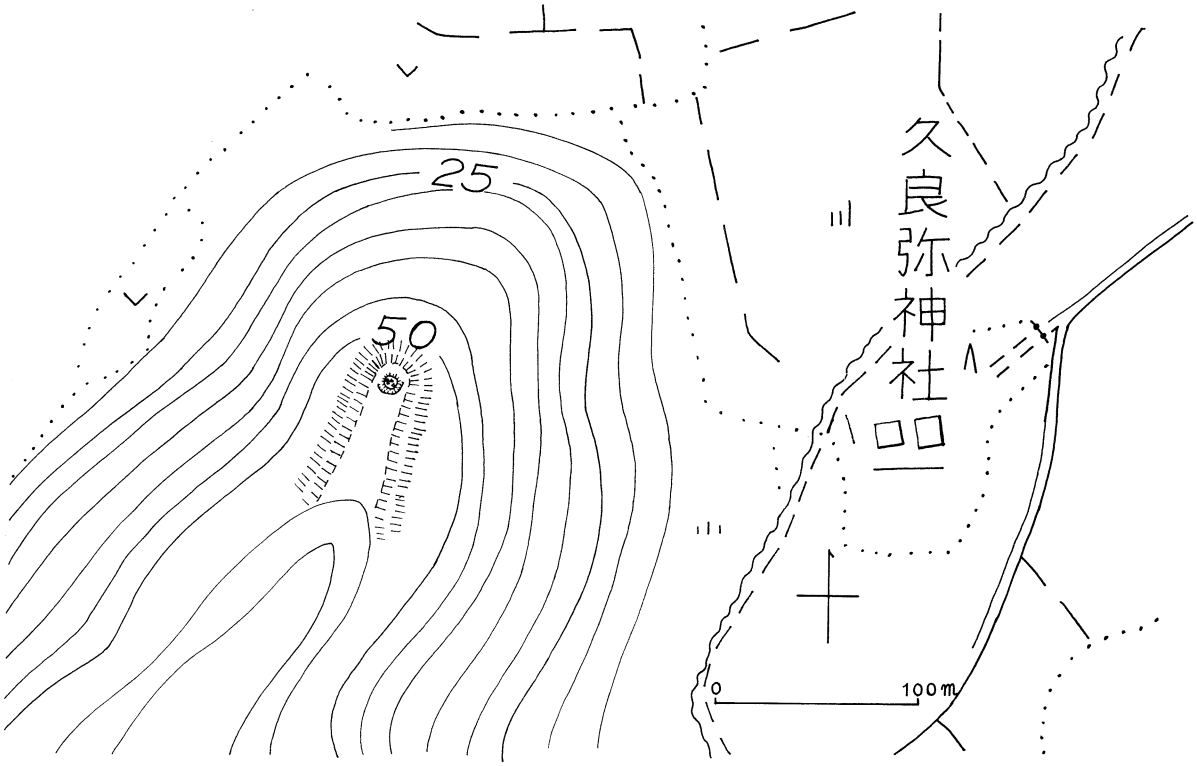
上本庄町木並(27)



邑生町上松古墓(26)

0　　1m

第26図　本庄地区の石塔



第27図　久良弥神社付近古墓

石祠横の石仏は、いずれも胴部半ばからと、頭部から欠損しているが、来待石製である。ほぼ同一規格のものである。足先を彫出する点では、最初に紹介した福田寺阿弥陀堂の石仏も同様で、規格も同様であることは注意したい。

四、上松（うえまつ）古墓（邑生町）

丘陵先端部に、土塁と溝にかこまれた一辺9メートルの区画が作られ、中央に五輪塔・石仏がある。

1五輪塔　地輪部には、石の節理か横に筋が入る。火輪部は凸凹のアバタのある石質である。安山岩の系統の石か。ほぞ穴は、四角とも円形とも決めがたい。空風輪部には短い縦の筋が目立つ。これも、火輪部同様安山岩系の石材か。

2五輪塔　地輪部は風化が激しく、元のサイズも不確かだが、たぶん地輪だろう。火輪部のほぞ穴は円形。火輪の石質は、安山岩系の石か。

3五輪塔　火輪部のほぞ穴は円形。空風輪部は、ほぞの取れた跡がある。火輪部のほぞ穴径は六センチメートル位で、空風輪部は八センチメートル位なので、これは確実にセットにならない。

4石仏　来待石製で、これも足先を彫出している。規格は、木並のものとは違うようだ。

五、久良弥（くらみ）神社西側丘陵の古墓（新庄町）

丘陵先端部に、高さ一メートル強、径六〜七メートルの古墓がある。墳丘上には、割り石が散乱している。周囲には溝か平坦地がある。

なお、古墓の背後の丘陵には、かなり細長く平坦地が続くが、ほかに墳丘は見当たらなかった。

六、おわりに

石塔等は、葬送とか供養に関連して建てられたものであろう。　前回に報告した「松田廟」は、本庄川流域の石塔の中でも大型のもので石質も良いものである。県内の似た形（時期）の例から類推すれば、本庄川流域の有力者個人の力で建てられたというより、「一結衆」など共同出資による建立の可能性を考えたい。いずれにしても、本庄川流域程度を範囲とするムラの存在が「松田廟」のバックに考えられる。

これが、少なくとも十六〜七世紀になると、現在の邑生町・上本庄町・新庄町のような、さらに細かい葬送・供養の単位の成立していることが石塔等から推定される。石祠のお地蔵様の存在などは、この小さなムラとムラの境を示したものであった可能性が考えられる。

各地で、石塔等の悉皆調査が進めば、これをもとにもっと徹底した議論が期待出来よう。

第四章　本庄川流域条里遺跡発掘調査に伴う花粉分析

渡辺　正巳

はじめに

本庄川流域条里遺跡は、島根県東部の松江市上本庄町地内に分布し、北山山地の枕木山西側に源流を持つ本庄川の扇状地上に立地する遺跡である。

本報は、島根県教育委員会が遺跡周辺地域での古植生の推定を行うために、川崎地質株式会社に委託して実施した分析報告書の概報である。

試料について

平成八年度調査区（図1）のⅢ1、2区内の3地点（図2、3）において、川崎地質株式会社が試料を採取した。

各地点の柱状図および試料採取層準を図4～6の花粉ダイアグラム左側に示す。

分析方法および分析結果

（一）分析方法

花粉分析処理は、渡辺（一九九五）に従って実施した。顕微鏡観察は光学顕微鏡を使用し、通常四百倍で、必要に応じ六百倍あるいは千倍を用いて行った。また、原則的に木本花粉化石総数が二百個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本花粉も同定した。しかし、一部の試料については、花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数で二百個体を越えることができなかった。

（二）分析結果

分析結果を図4～6の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉化石総数を基数にした百分率を、各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。

考察

（一）花粉分帯

花粉分析結果、および発掘担当者から御教授いただいた推定堆積年代をもとに、花粉分帯を行った。以下では、花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。また試料No.も下位から上位に向かって記した。

Ⅱ帯（SD06試料No.5～1）

特に高率を示す種類はないが、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、シイノ

キ属―マテバシイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示す。

Ⅰ帯（北東壁試料No.7～1、北西壁試料No.7～1）

マツ属（複維管束亜属）、スギ属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、モミ属、シイノキ属―マテバシイ属、コナラ亜属、アカガシ亜属も他の種類に比べやや高い出現率を示す。

また試料No.1～4では、下位の試料No.5～7に比べスギ属がやや高率に、マツ属（複維管束亜属）がやや低率になることから、下位をb亜帯（北東壁試料No.7～5、北西壁試料No.7～4）、上位をa亜帯（北東壁試料No.4～1、北西壁試料No.3～1）とした。

（二）他地点との比較と推定年代

一推定年代

以下に示す考古学的所見は、すべて島根県教育委員会（一九九七）を要約したものである。詳しくはそちらを参照されたい。

今回の調査地点のうち、SD06はⅢ2区で検出された旧河道と考えられる溝状遺構（SD06）内にある。また、遺構内および周辺から古墳時代の須恵器、土師器が検出されている。これらのことから、SD06で得られた試料は古墳時代に堆積したものであると考えられる。

北東壁、北西壁の各試料は、いずれもⅢ1区で検出された池状遺構から得られたものである。遺構内からは古墳時代以降、中世頃までの須恵器、土師器が検出される。下位ほど古い時期の遺物を含むことから、成層していると考えられる。これらのことから、北東壁、北西壁の各試料とも、古墳時代以降、中世頃までに連続して堆積したものと考えられる。

二他地点との対比

本調査地の東側には、標高四十メートル程度の尾根を分水嶺に朝酌川が流れる。隣接する地域であることから、朝酌川流域で得られる花粉組成と本調査地で得られる花粉組成には共通点が多く認められることが予想される。

朝酌川流域では一九七九年以降、下流域のタテチョウ遺跡、原の前遺跡、西川津遺跡で花粉分析が繰り返し行われてきた（例えば大西，一九七九）。

今回は、従来の成果をまとめた大西・渡辺（一九八七）（イネ科花粉帯および、細分した4亜帯がこの論文で設定された。しかし後に、大西ほか（一九九〇）により、典型亜帯をカシ・ナラ亜帯と亜帯名の変更が行われた。）と、本調査地点の分析結果を対比する。

Ⅱ帯（SD06試料No.5～1）

前述のようにⅡ帯では卓越した出現率を示す種類が存在せず、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、シイノキ属―マテバシイ属、アカガシ亜属、コナラ亜属がそれぞれ十～二十％程度の出現率で検出されるのみである。このような花粉組成は大西・渡辺（一九八七）ではイネ科花粉帯典型亜帯（後に大西ほか（一九九〇）により、イネ科花粉帯カシ・ナラ亜帯と名称の変更が行われた。しかし、本報告書では以下も典型亜帯とする。）で認められ、おおよそ古墳時代～中世（紀元千五百年頃）の植生を反映したものであるとしていた。

したがって、今回のⅡ帯層準が古墳時代に堆積したという仮定と一致した。

Ⅰ帯（北東壁試料No.7～1、北西壁試料No.7～1）

Ⅱ帯に比べマツ属（複維管束亜属）の出現率が高くなるものの、スギ属の

出現率も同様に高くなり、むしろ上部ではスギ属の出現率がマツ属（複維管束亜属）の出現率を上回る。さらにⅠ帯の認められる池状遺構とⅡ帯の認められるＳＤ０６には、堆積環境に大きな違いが見られ、近くに生育していたアカマツが過大に評価される可能性がある。

Ⅰ帯は、マツ属（複維管束亜属）の出現率のみからはマツ亜帯に対応するように見える。しかし上述のような事柄から、マツ亜帯の特徴である「マツ属（複維管束亜属）の卓越」があるとは認め難く、下位の典型亜帯に対応する可能性が強い。

Ⅰ帯を、Ⅱ帯と同様に典型亜帯とした場合、Ⅰ帯層準が古墳時代から中世に堆積したという仮定と一致した。

（三）古環境変遷

以下に各花粉帯毎に古植生を中心とした古環境の復元を試みた。

Ⅱ帯期（古墳時代）

遺跡背後の北山山地には、現在の潜在植生と同じシイ・カシ林が分布していたと考えられる。またこれらの構成種には、現在枕木山で自生しているモミや、現在周辺で自生種の認められないスギなどの針葉樹も含まれていたと考えられる。丘陵部で人手の加わった場所は、アカマツ、コナラ類、シデ類などを要素とする針広混淆林（いわゆる里山）で覆われていたと考えられる。

イネ科（四十ミクロン以上）の出現率が高いことから、ＳＤ０６の流域で水田が営まれていた可能性指摘できる。しかし、同時にカヤツリグサ科、イネ科（四十ミクロン未満）も高い出現率を示し、川岸あるいは、周辺の荒れ地の雑草に由来する可能性も否定できない。

ＳＤ０６の周辺の微高地（周辺が水田化していたとすれば畦など）には、ヨモギ類のほか、他のキク科や、キンポウゲ（以下、科名ではなく各々の代表的な種を示す。）、ナズナ、ナデシコ、アカザ、タデなどの草が生育していたと考えられる。

またＳＤ０６内や、流れ込む小河川沿い（あるいは水田内）には、オモダカや、セリ、キカシグサなどの水草が生育していたと考えられる。

Ⅰ帯期（古墳時代～中世）

マツ属（複維管束亜属）花粉の出現率がⅡ帯期と比べやや高くなり、丘陵部でのアカマツ林の拡大を示唆すると考えられる。しかし、本帯の花粉組成は（閉鎖的？）な池状遺構から得られたものであり、かつ最下部もⅡ帯期と重複する事から、上流域の北山山地からの影響は少なく、より狭い範囲の植生を反映している可能性も指摘できる。

いずれにしろⅡ帯期と同様に、遺跡背後の北山山地には、現在の潜在植生と同じシイ・カシ林が分布していたと考えられる。またこれらの構成種も、Ⅱ帯期と同様で、モミやスギなどの針葉樹を含んでいたと考えられる。Ⅱ帯とⅠ帯下部との花粉組成の変化を母植物からの遠近による地域差と考えると、丘陵部の人手の加わった場所はアカマツ、コナラ類、シデ類などを要素とする針広混淆林で、より人手の加わった扇状地縁辺部はアカマツ林で覆われていた可能性もある。

ａ亜帯期に入り、スギ属花粉がやや増加する。この現象は西側の朝酌川流域では、従来認められていなかった。一時的に降雨量が増加した、あるいは気温が低下したなど、スギの生育に適した気候条件の変化も要因に考えられるが、類例に乏しいことから、今後の検討課題として残る。

また、イネ科（四十ミクロン以上）の出現率が高いことから、池状遺構近辺で水田が営まれていた可能性が強い。周辺の微高地や畦などには、ヨモギ類のほか、他のキク科や、キンポウゲ（以下、科名ではなく各々の代表的な種を示す。）、ナズナ、ナデシコ、アカザ、タデなどの草が生育していたと考えられる。池内や、周辺の水田内には、サジオモダカ、オモダカ、コウホネ、セリ、キカシグサなどのさまざまな水草が生育していたと考えられる。

まとめ

今回の分析結果から、以下のことを考察した。

（一）花粉分析結果からⅠ、Ⅱ帯を設定した。さらにⅠ帯を、a、b亜帯に細分した。

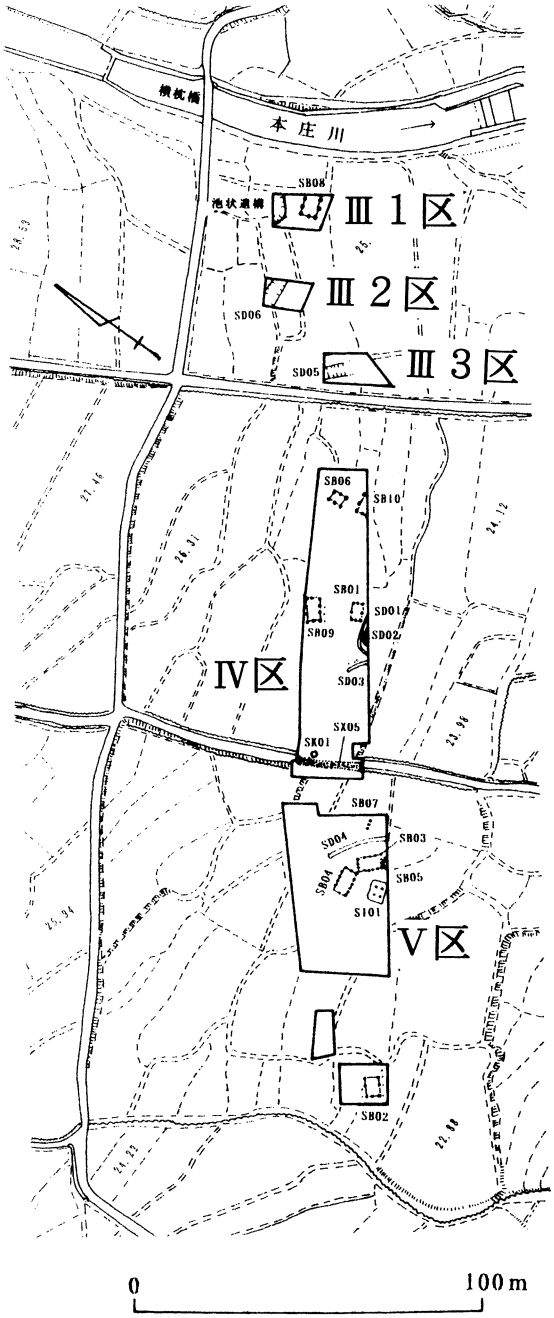
（二）今回の花粉帯と、朝酌川下流の遺跡群での花粉帯を比較した。その結果、各花粉帯の特徴がほぼ一致した。ただし、今回の結果でマツ属（複維管束亜属）の出現率が高い原因を、堆積環境の違いにより局地性を示した結果であると考えた。

（三）Ⅱ、Ⅰ帯期の遺跡周辺の古環境の一部を推定した。今回の調査で特筆すべき事項は以下の通りである。

一、今回初めて認められたⅠ帯a亜帯でのスギ属の増加傾向の原因は、周辺地域での今後のデータの積み重ねにより明らかになろう。

現時点では、スギの生育に適した環境、降水量の増加、気温の低下などが考えられる。

二、遺構は検出されていないものの、Ⅱ帯期以降、遺構周辺で稲作が行われていたと考えられる。今後、プラント・オパール分析などによる再調査も必要になる。



第28図　調査区の配置

引用文献

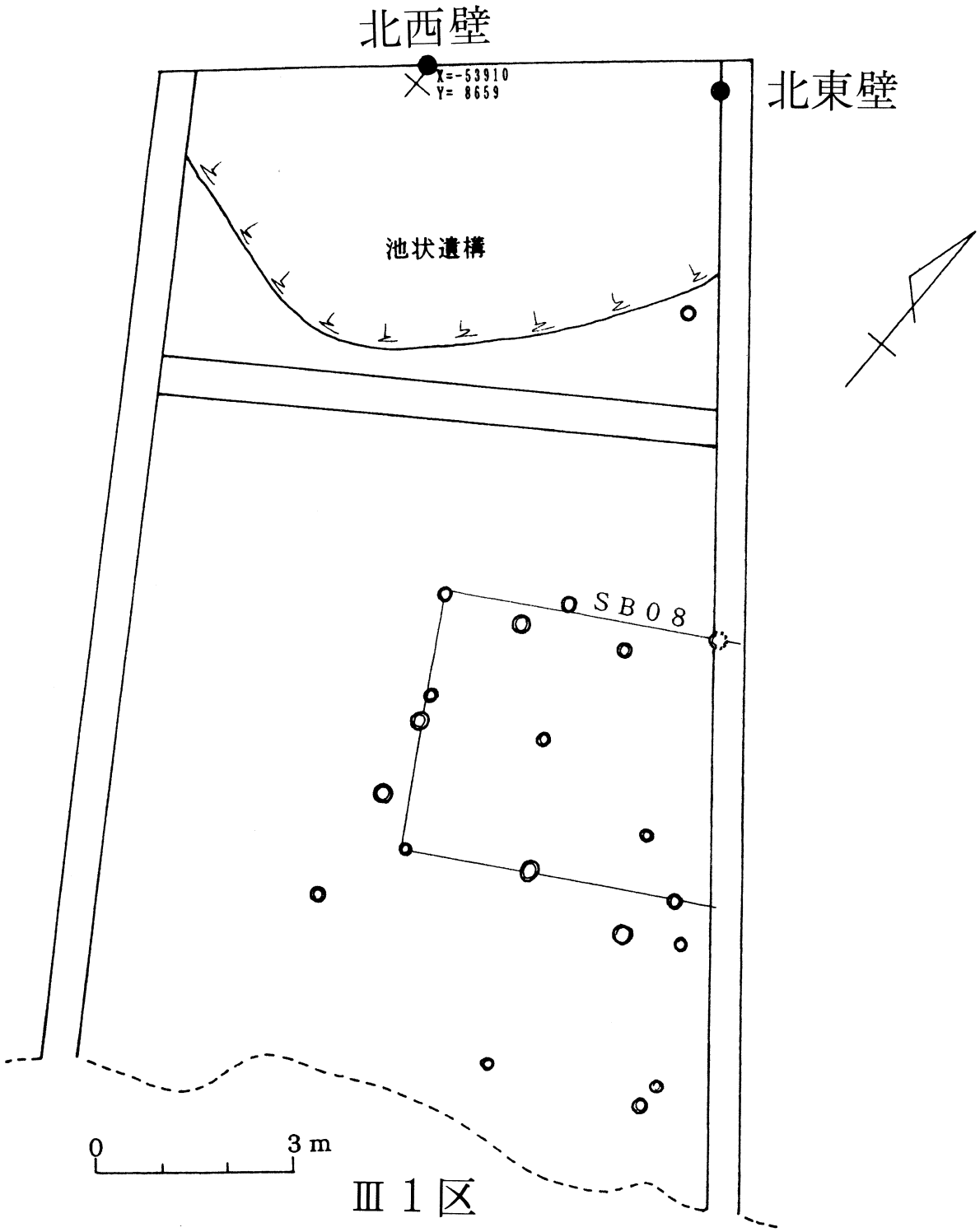
大西郁夫（一九七九）花粉の分析、朝酌川河川改修工事に伴

うタテチョウ遺跡発掘調査報告Ⅰ、一八八-一九三、島根県教育委員会、島根県、大西郁夫・渡辺正巳（一九八七）松江市西川津町、タテチョウ遺跡の花粉分析、山陰地域研究（自然環境）、三・一〇九・一二〇

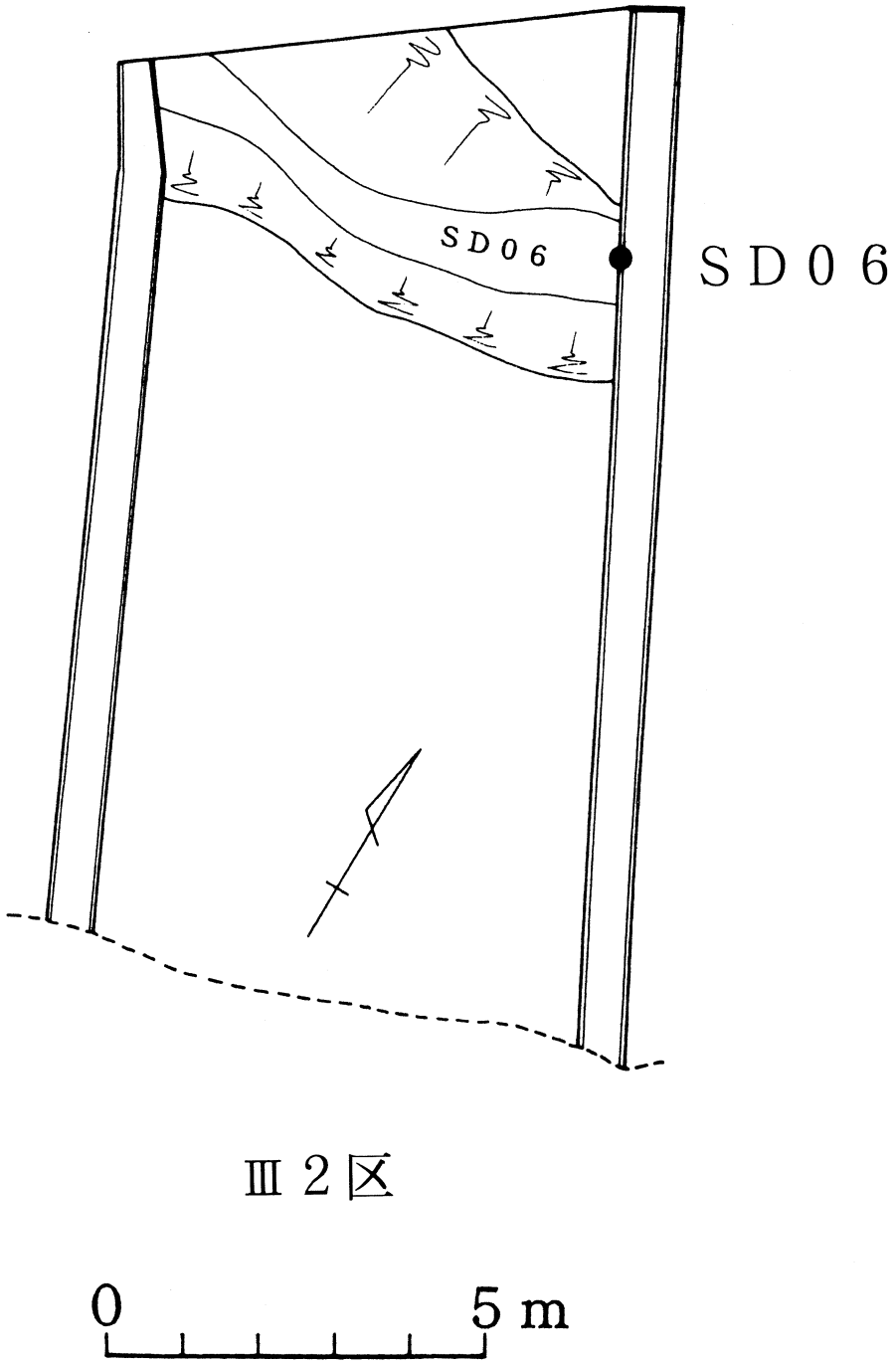
大西郁夫・干場英樹・中谷紀子（一九九〇）宍道湖湖底下完新統の花粉群、島根大学地質学研究報告、九・一一七－一二七

島根県教育委員会（一九九七）国道四三一号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－本庄川流域条里遺跡－、八二P、島根

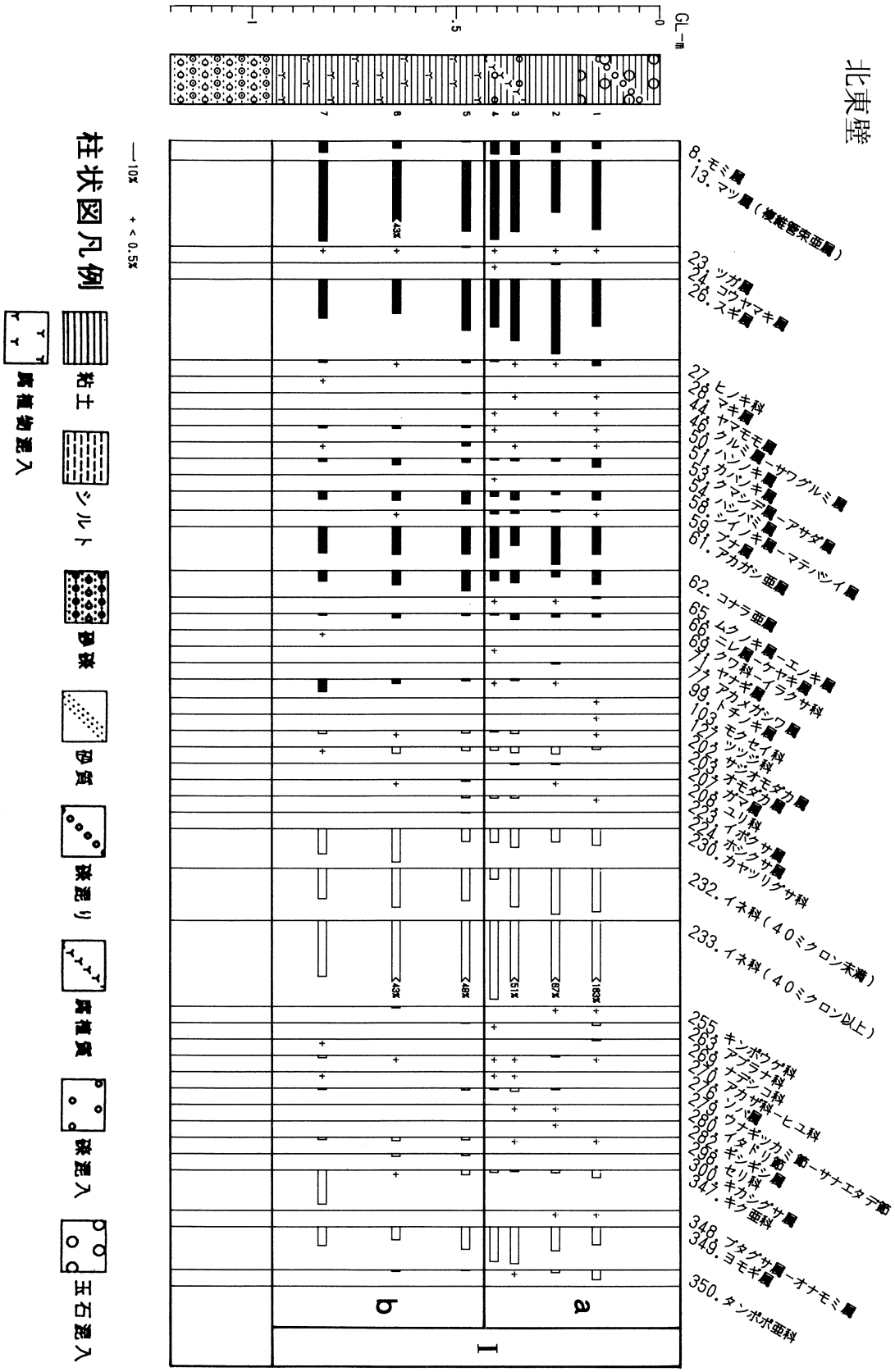
渡辺正巳（一九九五）花粉分析方法、考古資料分析法、八四-八五、ニュー・サイエンス社、東京



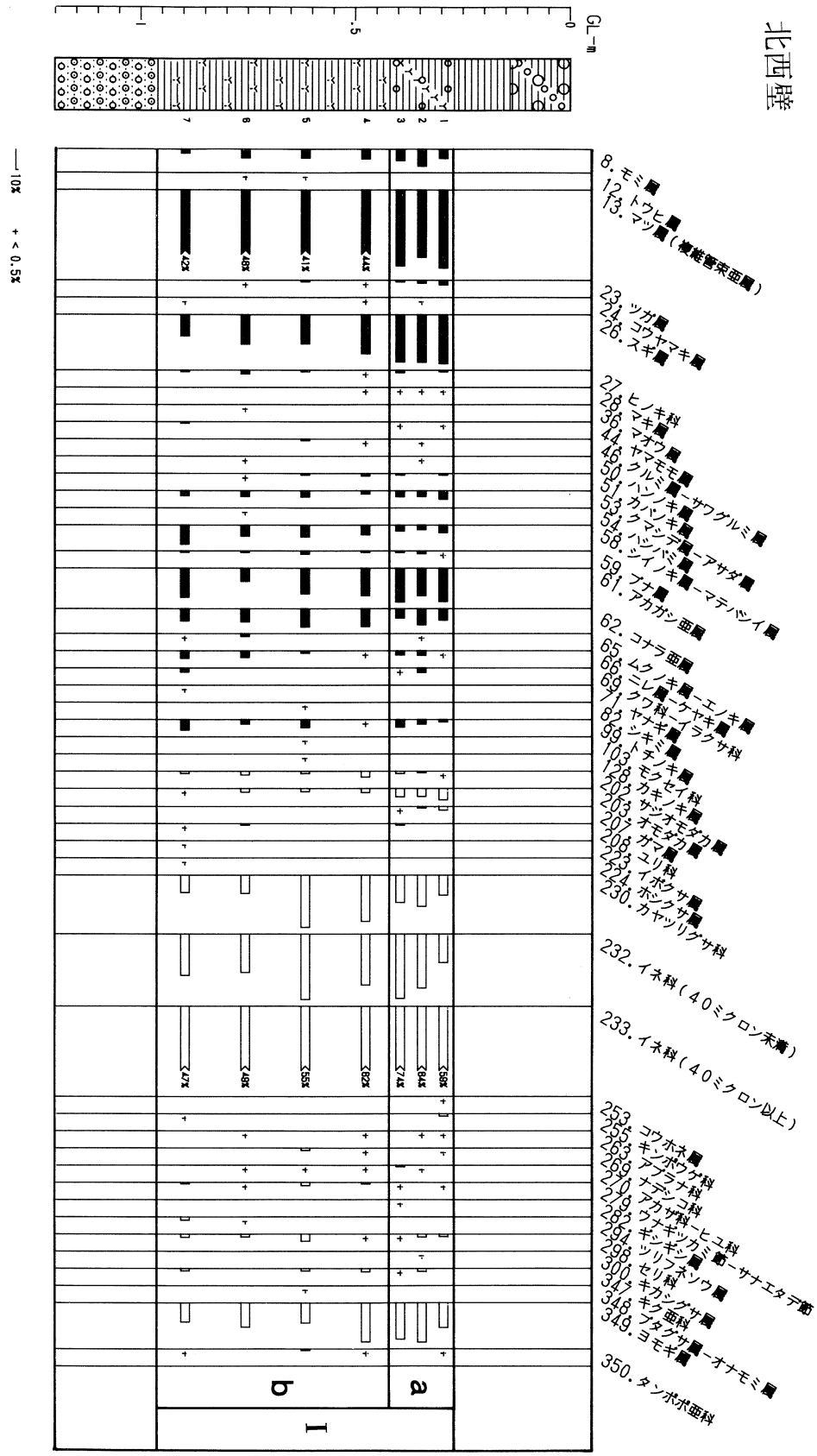
第29図　Ⅲ 1 区内の試料採取地点



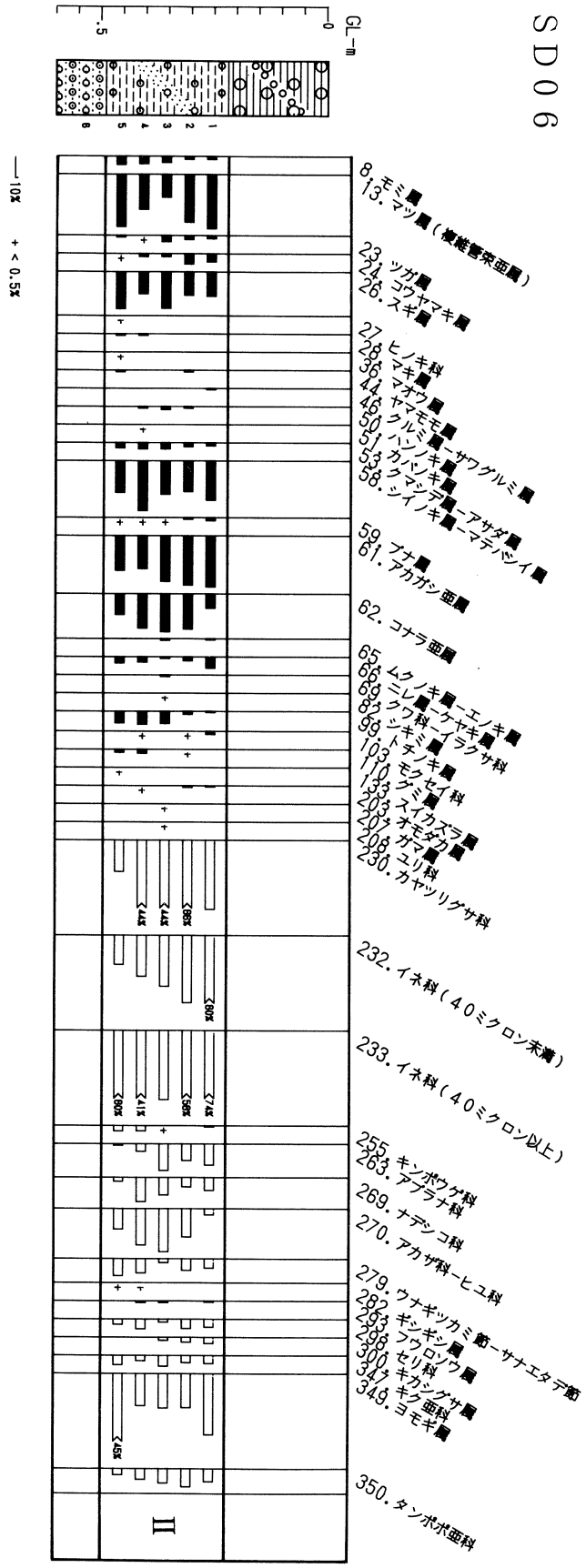
第30図　Ⅲ２区内の試料採取地点



第31図　北東壁の花粉ダイヤグラム



第32図　北西壁の花粉ダイヤグラム



第33図　SD06の花粉ダイヤグラム

第五章　まとめ

以下、平成九年度調査した荒船古墳群と本庄川流域条里遺跡の調査のあらましをまとめる。

荒船古墳群は一辺一〇メートル前後の小規模方墳で構成され、この地方に横穴式石室が普及する以前の墓制として位置付けられよう。但し、3号墳の墳丘上で発見された須恵器は古墳築造時期より新しく山陰第三期のものである。松江市古曽志町古曽志大谷一号墳[1]は、全長四〇メートルの中期の前方後方墳であるが、後方部には山陰第三期の須恵器が古墳築造後に供献されており何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。荒船3号墳の場合もあるいはそうした祭祀行為があったことを示すものであるのかもしれない。

本庄川流域条里遺跡では、Ⅰ区～Ⅲ区が今日みられるような農村景観になるまでには、幾度かの開発が繰り返されていることが判明した。それは次のようにまとめることができる。

① 調査対象区東側のⅠ区は、丘陵部に近いその東側が大きく削平されていること。

② Ⅰ区の西に行くにしたがい旧地形が落ち込み、Ⅱ区との間に深い谷地形が入り込んでいること。

③ Ⅱ区は削平されているが、竪穴建物跡の柱穴のすべてを削平するほどでなく、比較的安定した場所であったこと。

④ Ⅲ区の東側は少なくとも弥生時代から近世に至るまで、河川や沼地、湿地という自然環境であり、それは西に向かってより深くなっており、現本庄川の位置を決定づけたらしいこと。

⑤ Ⅲ区西側は、東側の湿地の続きの上に盛土や盛石を行い造成して利用していること。

これらを、検出した遺構との関係を推定すると次のようである。

a ①②のことはＳＫ０４が落とし穴であるとの推定を可能にする。

b ③のことは、古墳時代の集落は微高地がえらばれたことを示している。このことは平成八年度調査結果と矛盾しない。

c ④のことは、弥生時代は原地形をあまり改変せずに利用した農耕がおこなわれ、集落も付近に存在することを示す。検出した石組遺構は西川津遺跡と同様であり弥生時代の集落のあり方を知る貴重な資料となった。また、石斧等の道具類の石器の出土が皆無であったことは弥生時代後期に鉄製品が普及していたという通説を裏付ける。

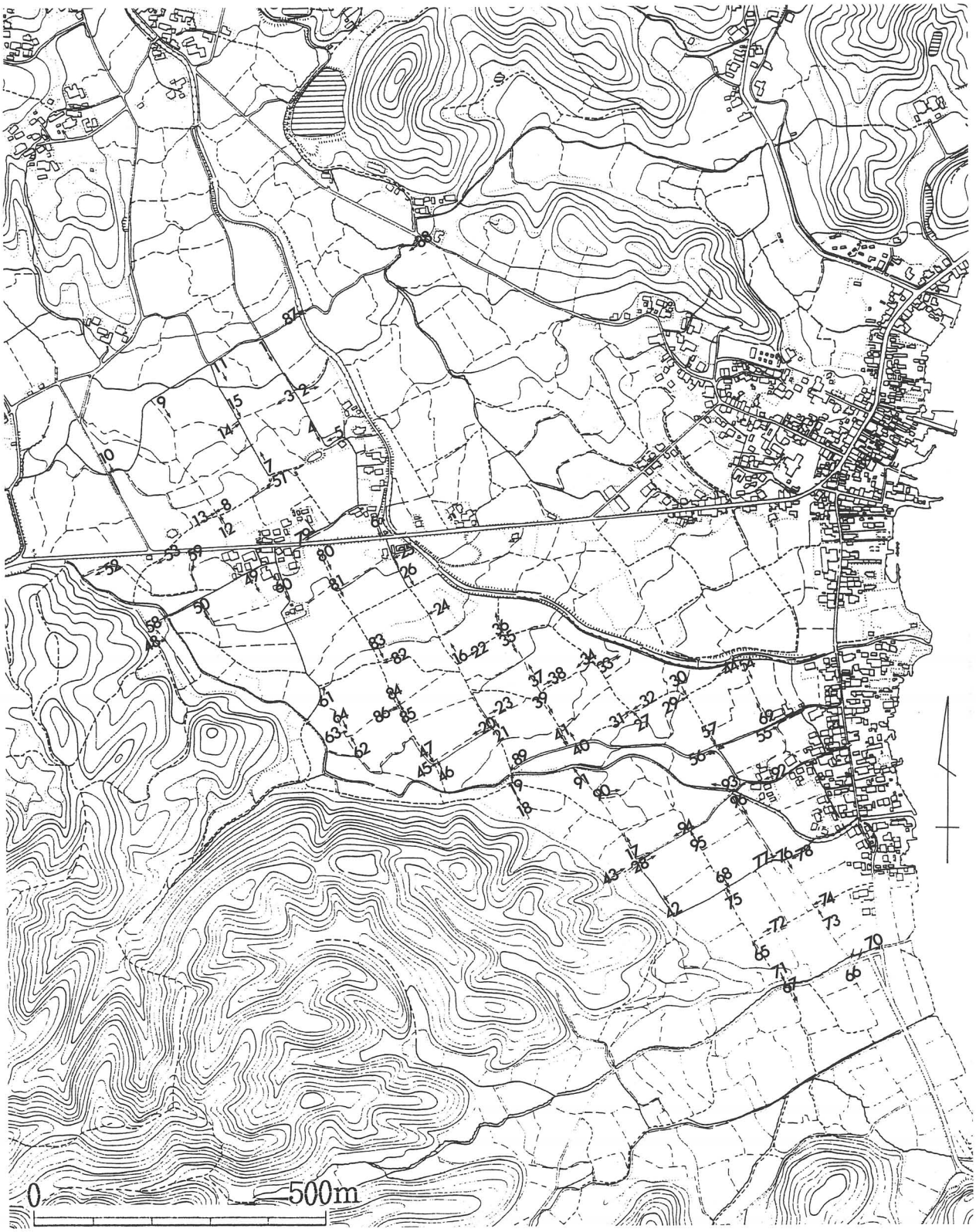
d ⑤のことから、瓦礫層地を耕作地として利用する方法の一つが推定された。

なお、第34図に本庄川流域に残る条里遺構の坪境撮影位置図を示し、平成八年度調査報告書第58図の参考にした[2]。

注

1、足立克己、丹羽野裕『古曽志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会、一九八九

2、内田律雄『本庄川流域条里遺跡』島根県教育委員会　一九九七



第34図　坪堺撮影位置図

写真図版

凡　例

2－15は第2図15を示す

図版 1

①荒船古墳・荒船遺跡遠景

②荒船3号墳（調査前）

③荒船3号墳（調査後）

④荒船3号墳（切削溝　西より）

図版 3

⑤荒船3号墳（切削溝　東より）

⑥荒船3号墳須恵器出土状態

⑦荒船3号墳須恵器出土状態

⑧荒船3号墳主体部太刀出土状態

図版 5

⑨荒船3号墳主体部太刀出土状態

⑩荒船3号墳主体部（西より）

⑪荒船3号墳主体部刀子出土状態

⑫荒船4号墳（調査前）

図版 7

⑬荒船4号墳（調査中　東より）

⑭荒船4号墳（切削溝　西より）

⑮荒船4号墳（調査後　東より）

⑯荒船4号墳（調査後　南より）

図版 9

⑰荒船4号墳（調査後　遠景）

⑱荒船1号墳（北より）

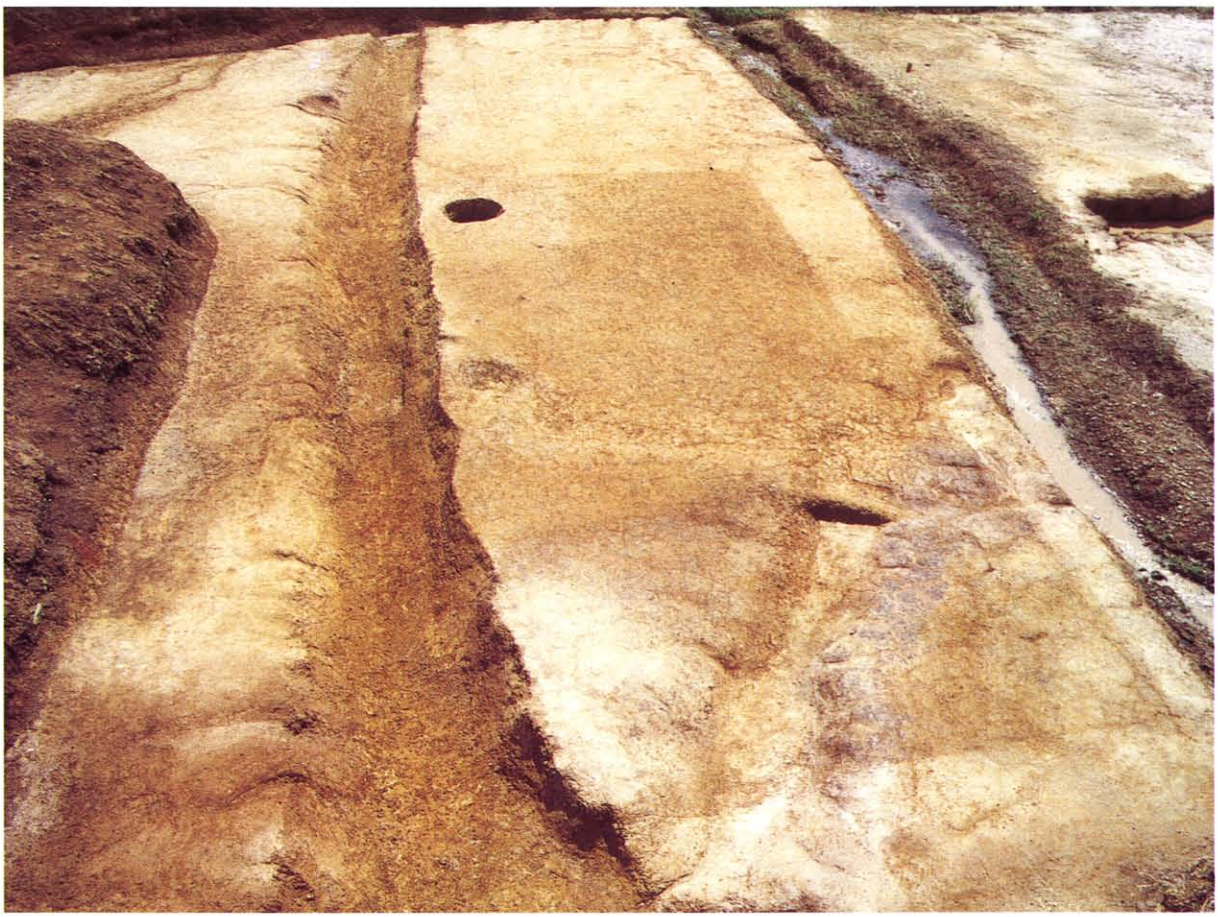
⑲荒船1号墳（右）、2号墳（左）

⑳荒船遺跡（南より）

図版 11

㉑荒船遺跡調査区断面

㉒荒船古墳Ⅱ区



㉓本庄川流域条里遺跡Ⅰ区（北より）

㉔同Ⅰ区　SK03

図版 13

㉕同Ⅰ区　SK04（断面）

㉖同Ⅰ区　SK04

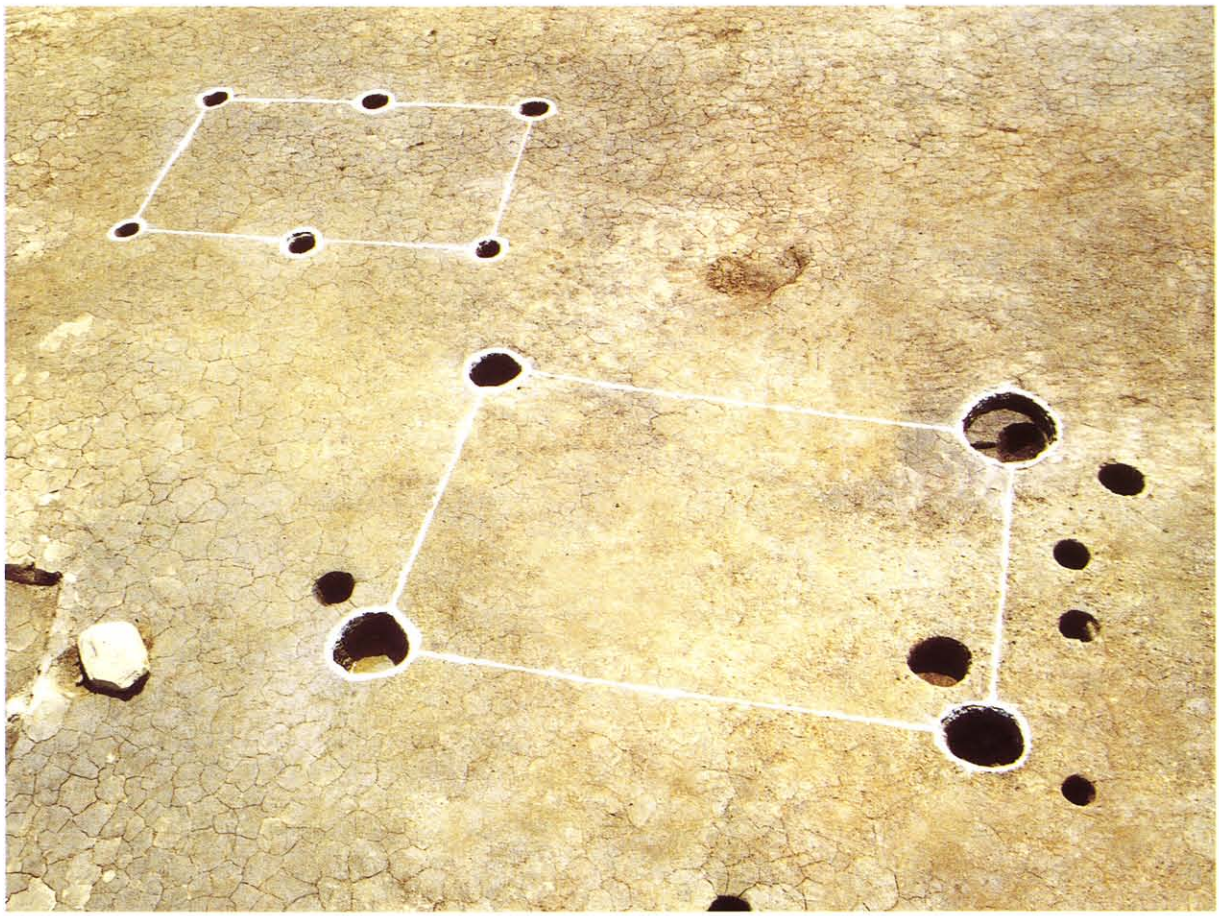
㉗同Ⅱ区調査中（中央の山は嵩山）

㉘同Ⅱ区　全景（西より）

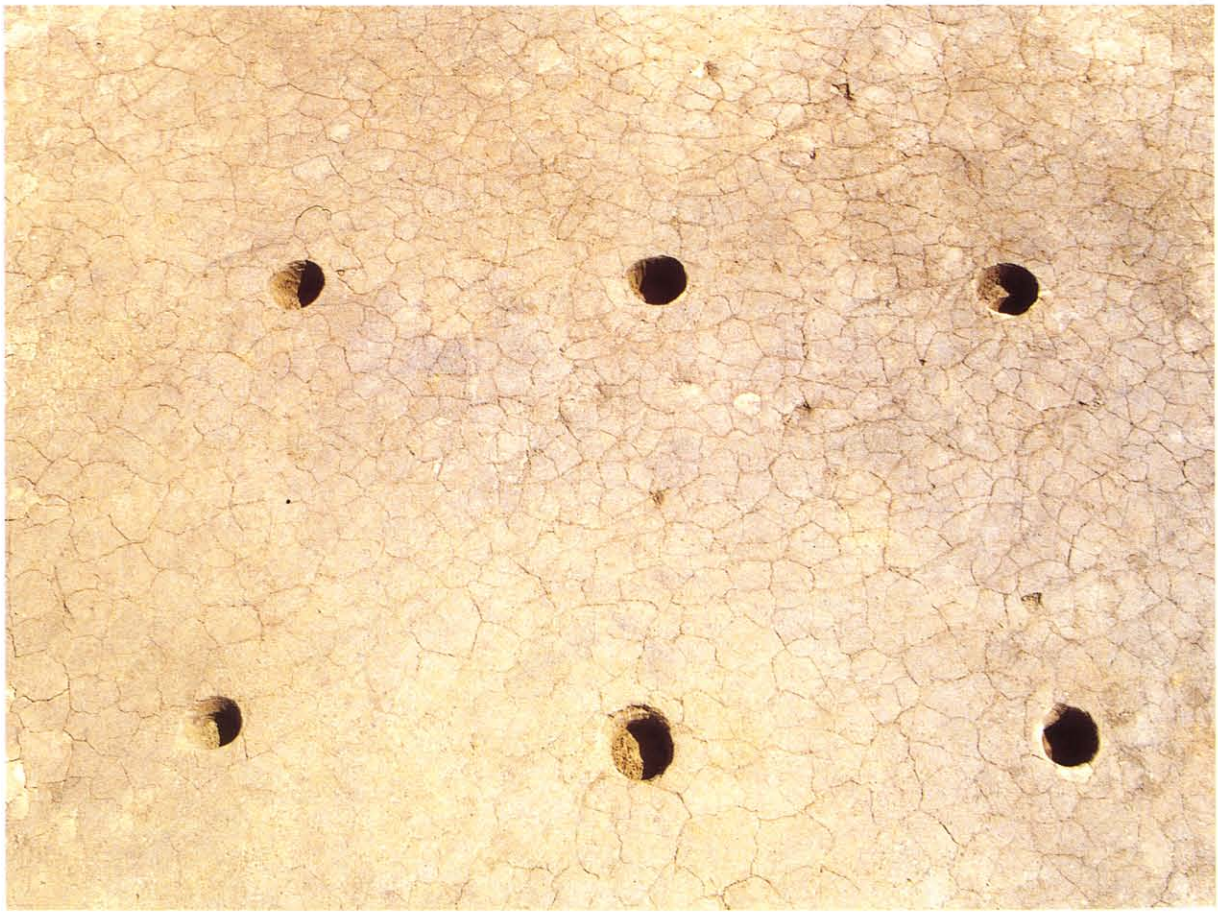
図版 15

㉙同Ⅱ区　SI02（東より）

㉚同Ⅱ区　SD09（西より）

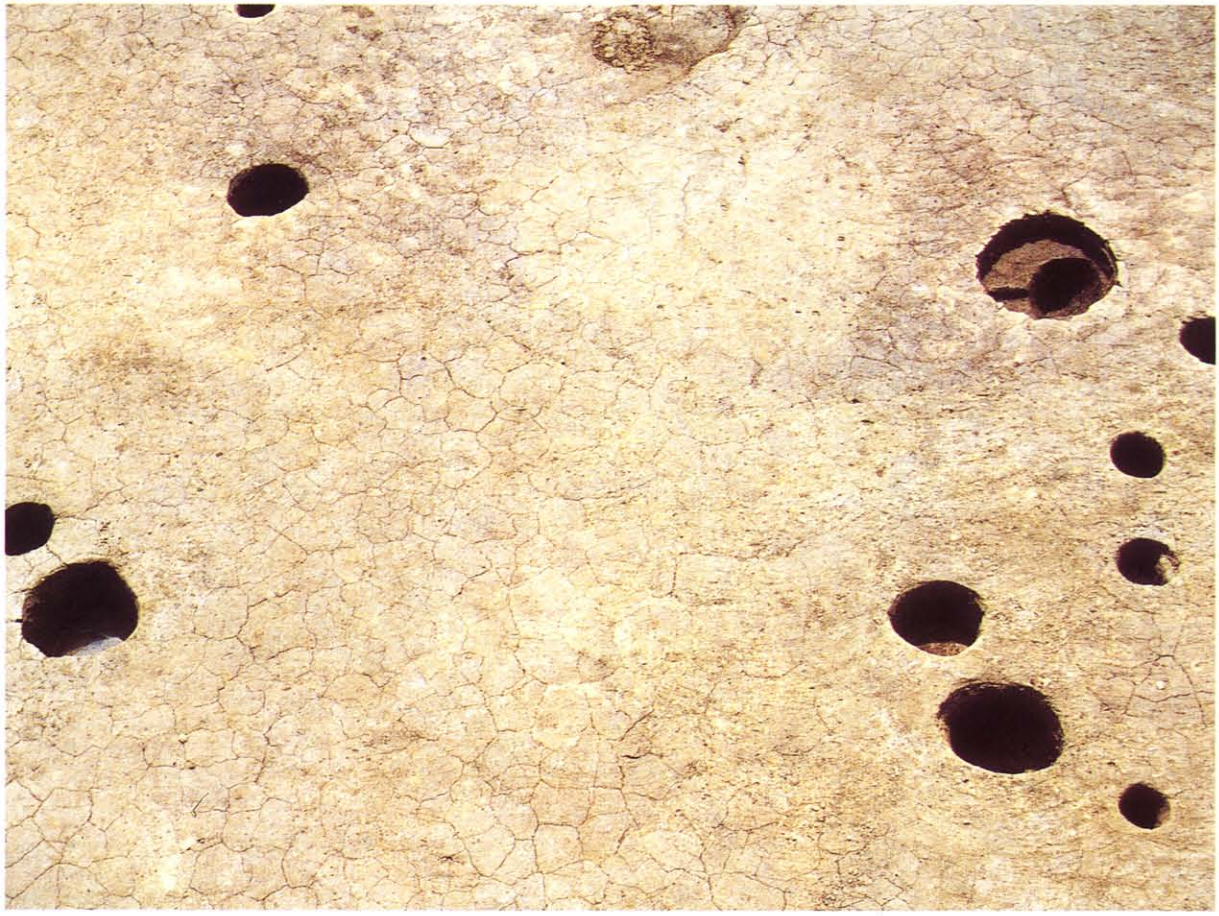


㉛同Ⅱ区　SB11・12



㉜同Ⅱ区　SB11

図版 17



㉝同Ⅱ区　SB12

㉞同Ⅱ区　SB13

㉟同Ⅱ区　SK05　遺物出土状態

㊱同Ⅱ区　SK05（調査後）

図版 19

㊲同Ⅲ区　第1調査区（北より）

㊳同Ⅲ区　第1調査区　SR01（南より）

㊴同Ⅲ区　第1調査区（北より）

㊵同Ⅲ区　第1調査区　南壁

図版 21

㊶同Ⅲ区　第1調査区　西壁

㊷同Ⅲ区　第1調査区　北壁　SR01

㊸同Ⅲ区　第1調査区　材木部分

㊹同Ⅲ区　第2調査区（北より）

図版 23

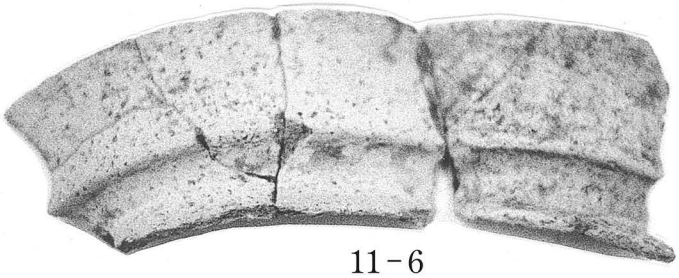
㊺上本庄町福田寺阿弥陀堂石塔

㊻上本庄町横枕橋付近石塔

㊼上本庄町木並石塔

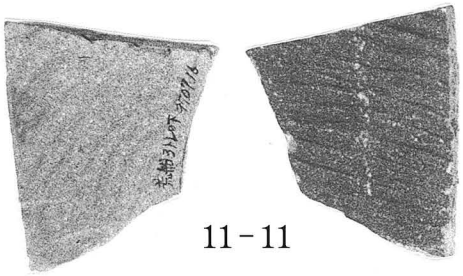
㊽邑生町上松古墓

図版 25

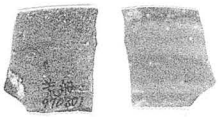


11－6

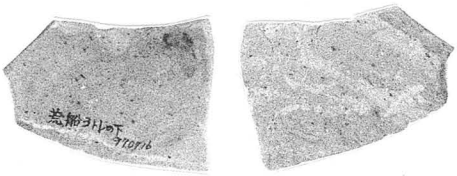
11－5



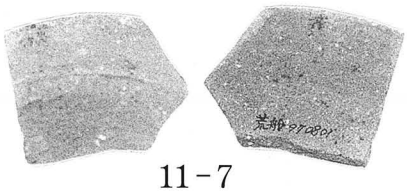
11－11



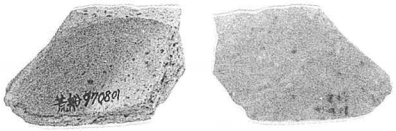
11－8



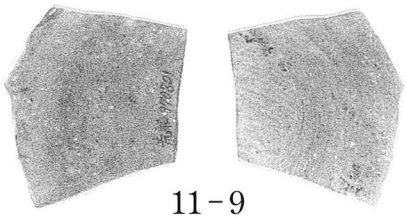
11－12



11－7

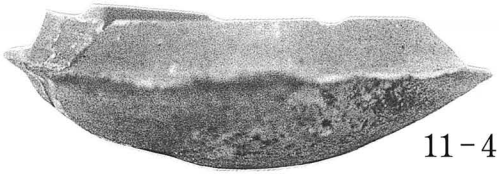


11－10



11－9

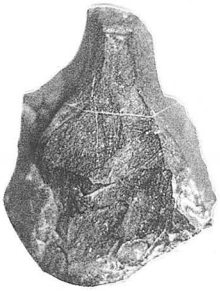
11－3



11－4

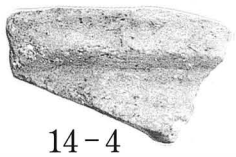
11－1

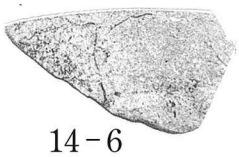
11－2


14－1

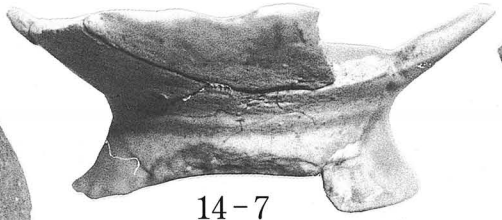
14－2

14－3

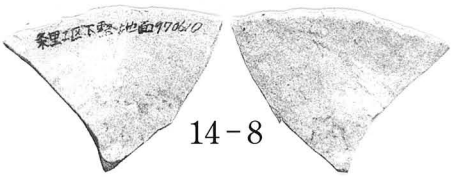

14－4


14－6

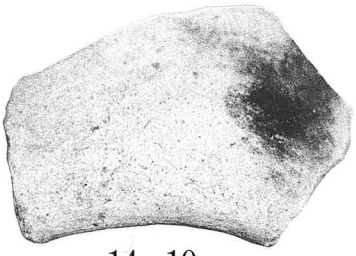
14－5

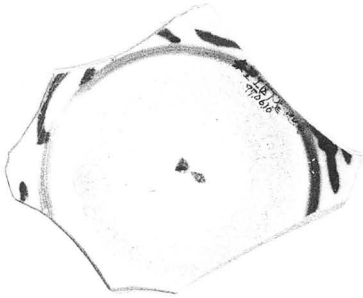

14－7

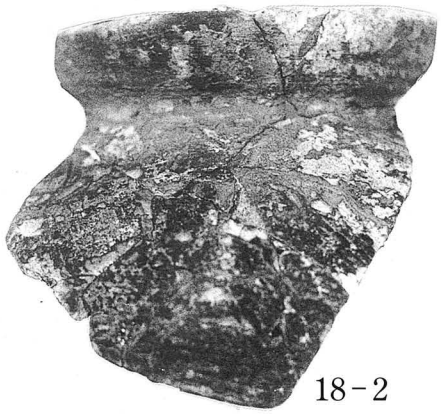
14－11

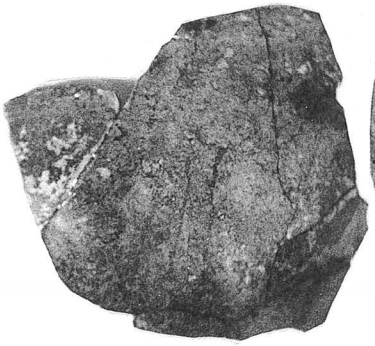

14－8

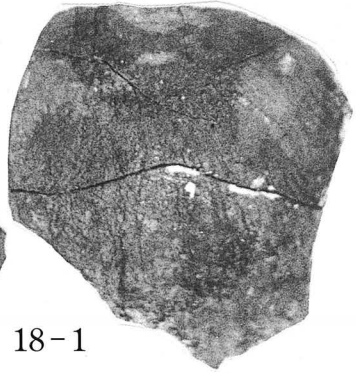
14－9

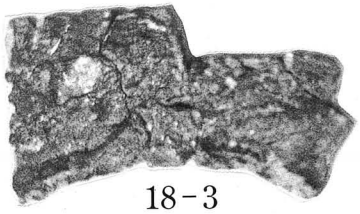

14－10


14－12


18－2

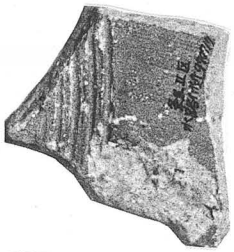


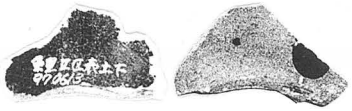

18－1


18－3

図版 27

18－4

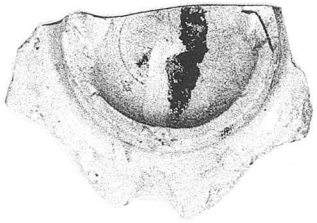

18－6


18－7

18－5

18－10

18－11


18－8

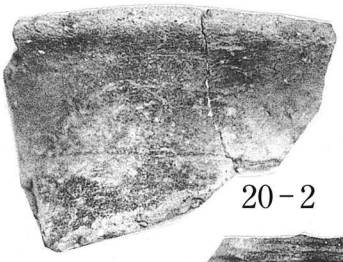
18－9

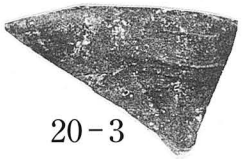
18－13

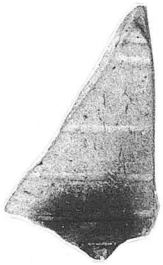
18－12

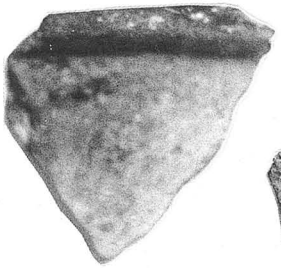
18－14

18－15

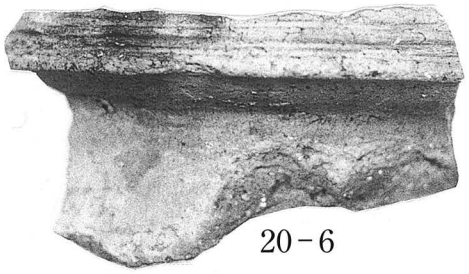

20－2


20－3

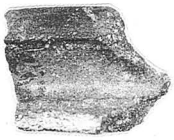

20－4


20－1

20－5

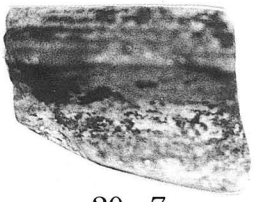

20－6

20－8

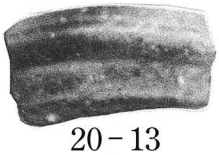

20－9

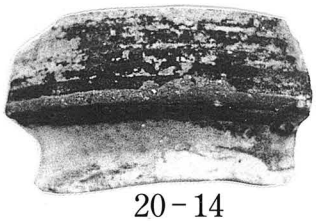
20－10

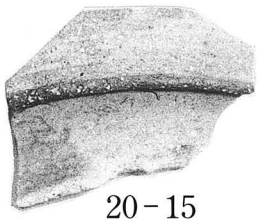
20－11

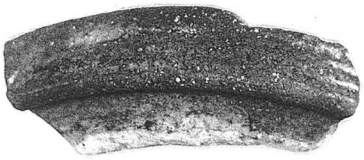

20－7

20－12

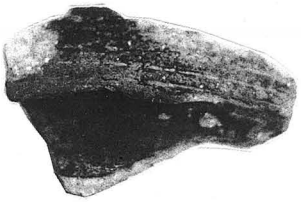

20－13

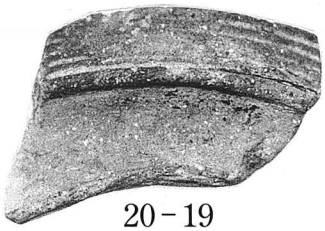

20－14

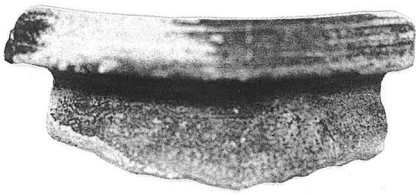

20－15

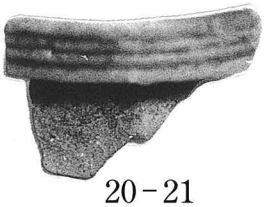

20－16

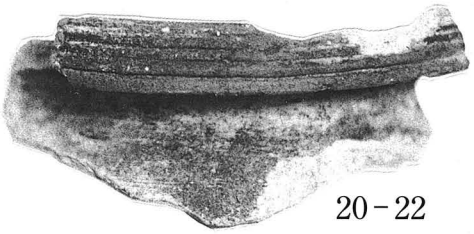
20－17

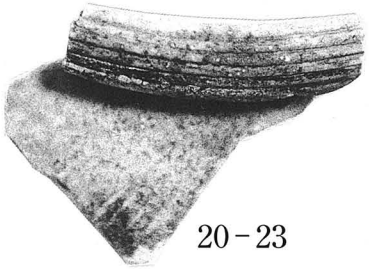

20－18

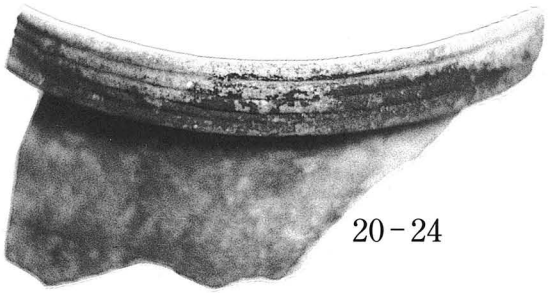

20－19

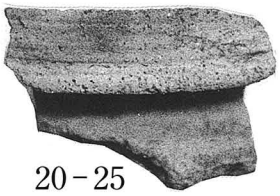

20－20

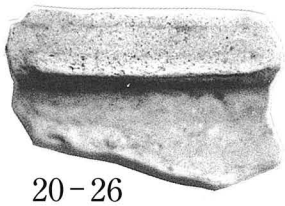

20－21

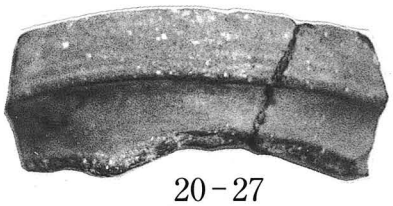

20－22


20－23


20－24

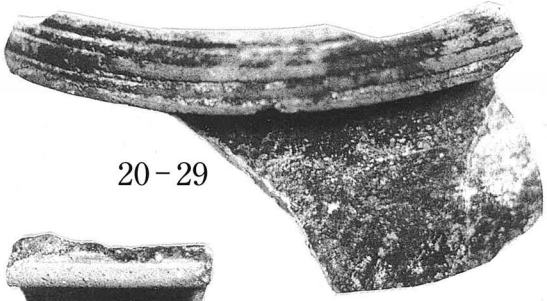

20－25

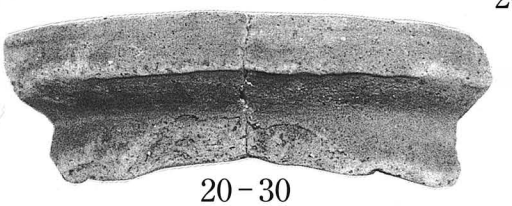

20－26


20－27

20－28

20－31

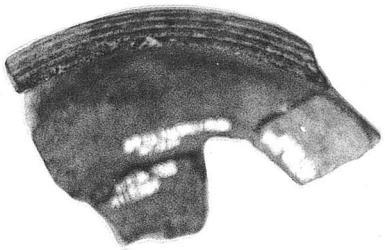

20－29


20－30

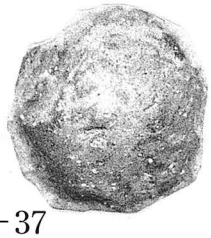
20－39

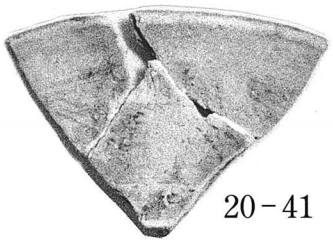
20－32

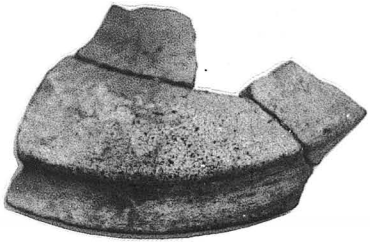
20－33



20－34


20－37

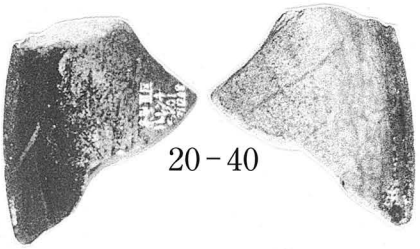

20－41


20－35

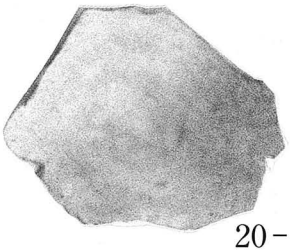
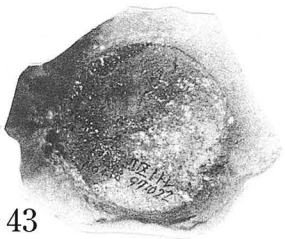
図版 29

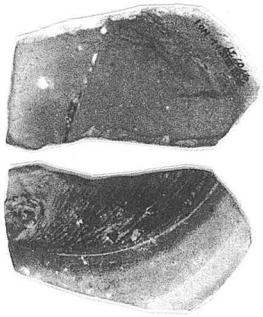
20－36

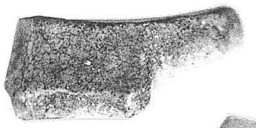
20－38


20－40

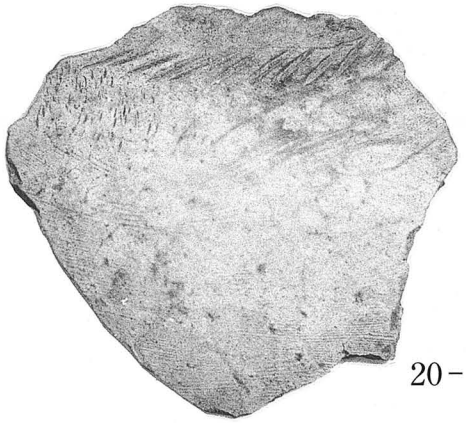
20－42



20－43


20－44

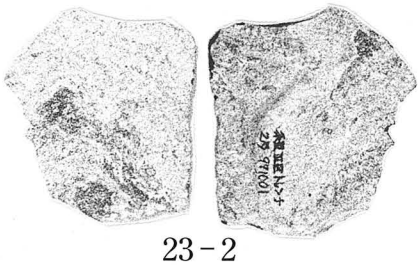

20－45

20－46



20－47

23－1


23－2

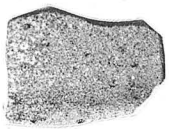
23－3

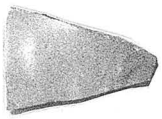
23－4

23－5

23－6

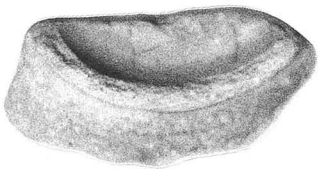
23－7


23－8

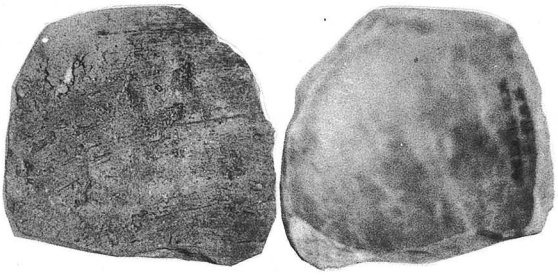


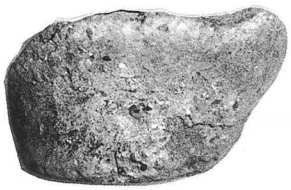
23－12

23－9

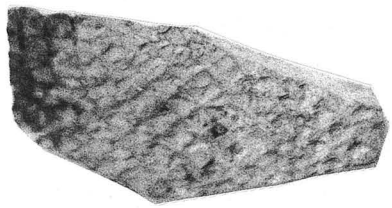

23－10

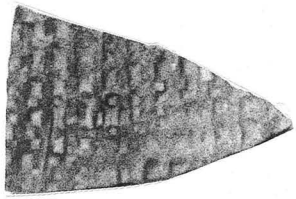
23－15


23－13

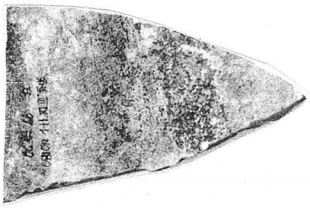

25－1

25－2

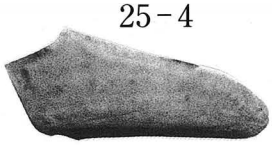

23－14

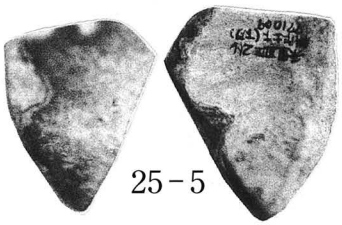


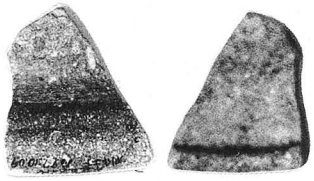
25－3

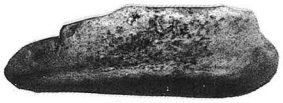


25－4

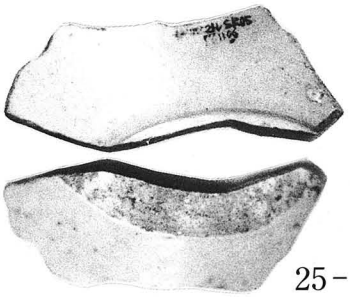

25－6

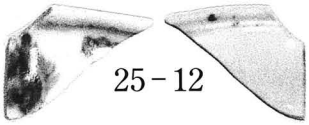

25－5


25－8


25－7

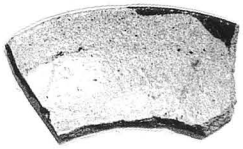
25－10


25－11


25－12

25－13

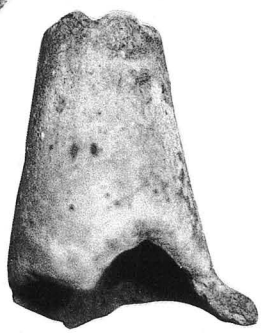
25－14


25－15

25－22

25－16

25－23


25－17

25－18

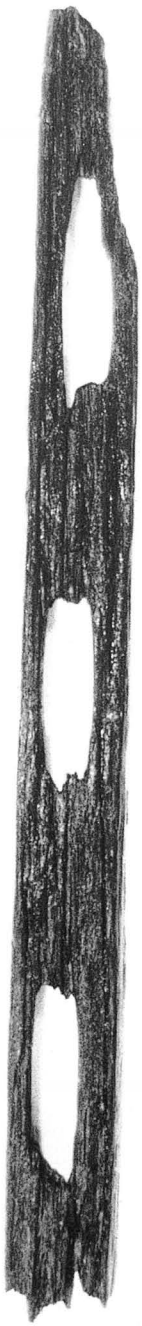
25－19

25－20

25－21

図版 31

22－6



22－5

22－3

22－4

22－1

22－15

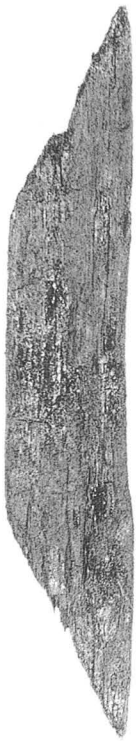
22－14

22－9

22－16

22－13

22－2


22－8

22－7

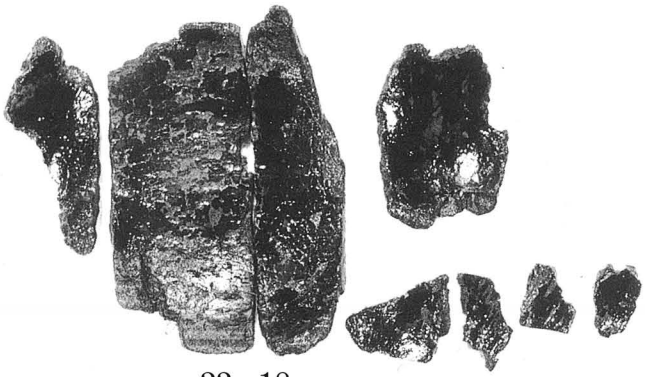
21－32

22－12

22－11

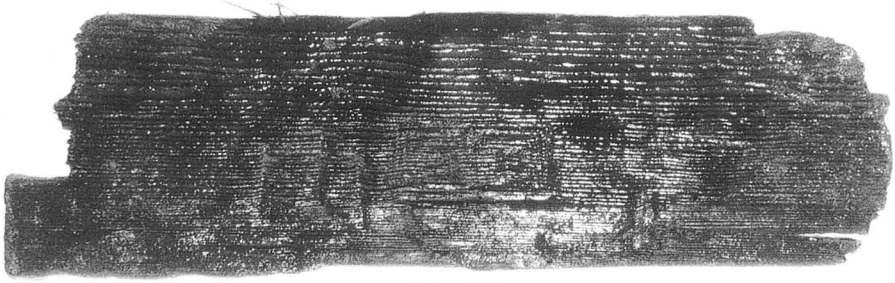
22－10

22－17

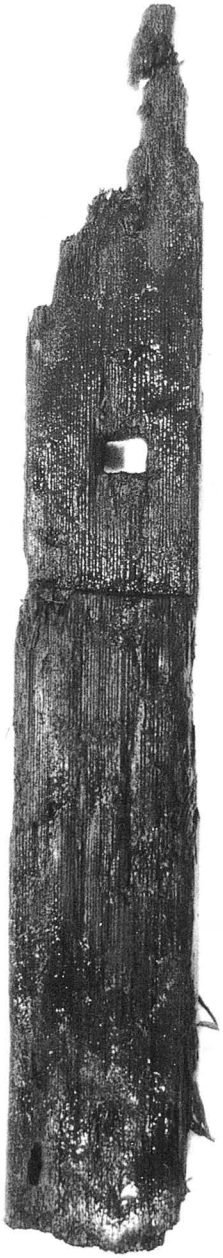

22－18

22－19

21－30


21－29

図版 33



21－22

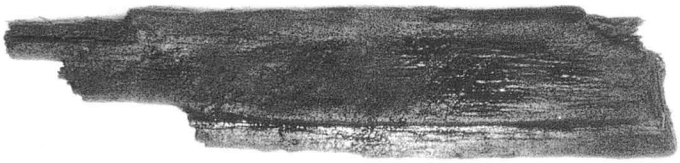
21－19

21－25

21－24

21－26

21－28

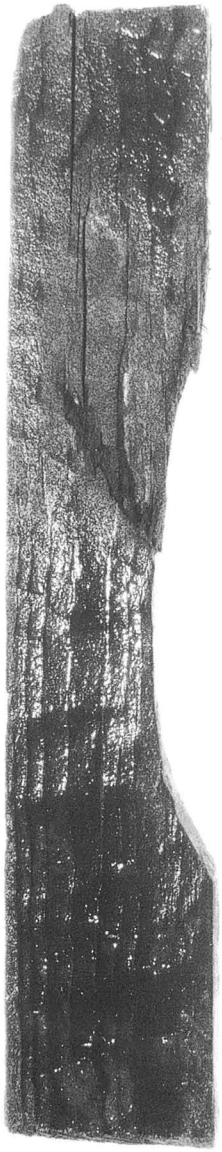


21－33

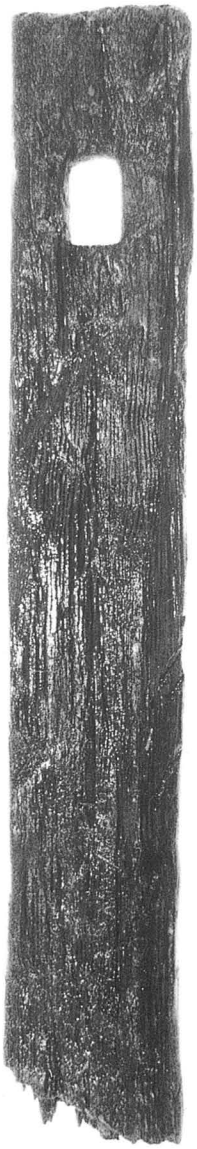
21－39

21－35

21－40



21－34

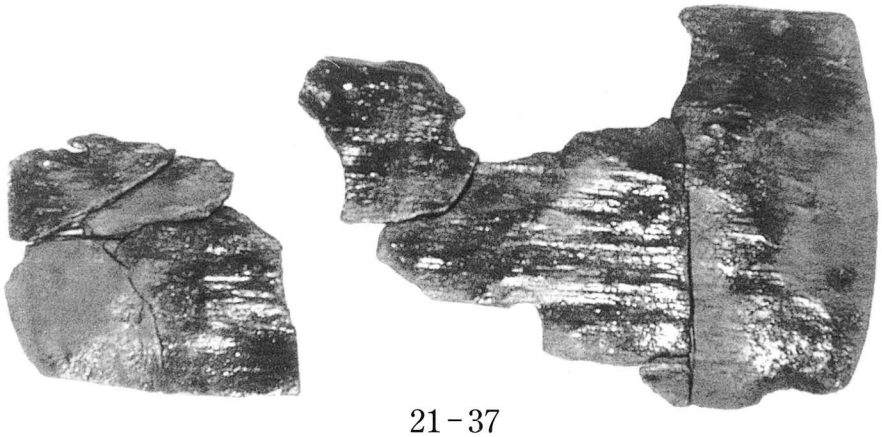


21－23

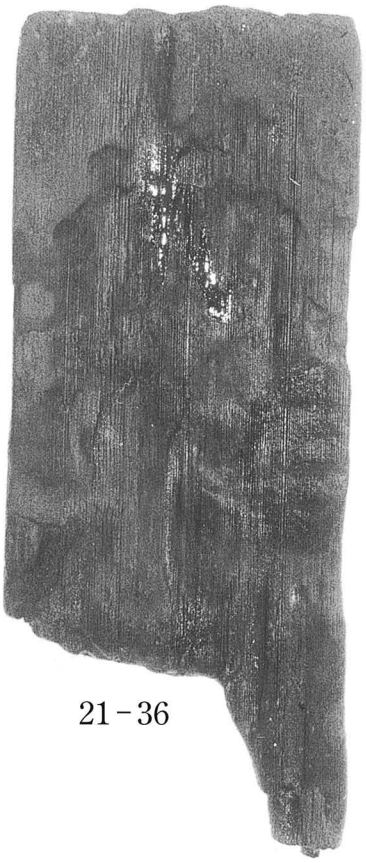
21－38

21－27

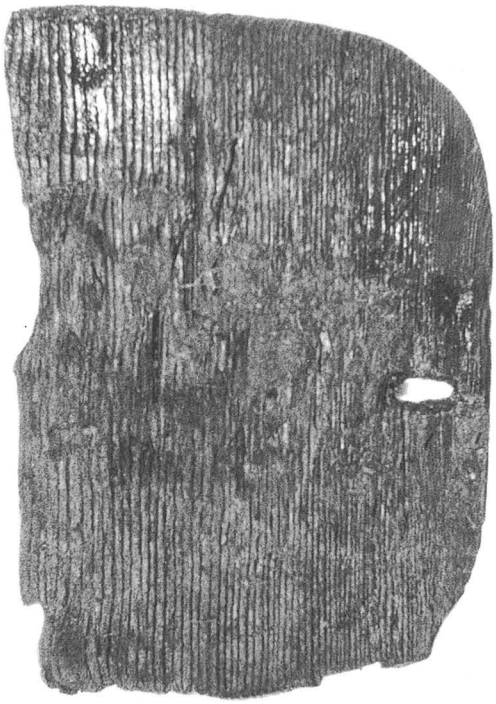
21－21



21－37

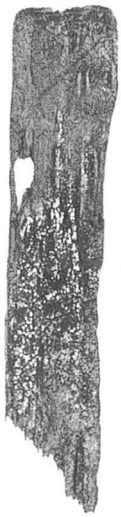


21－36

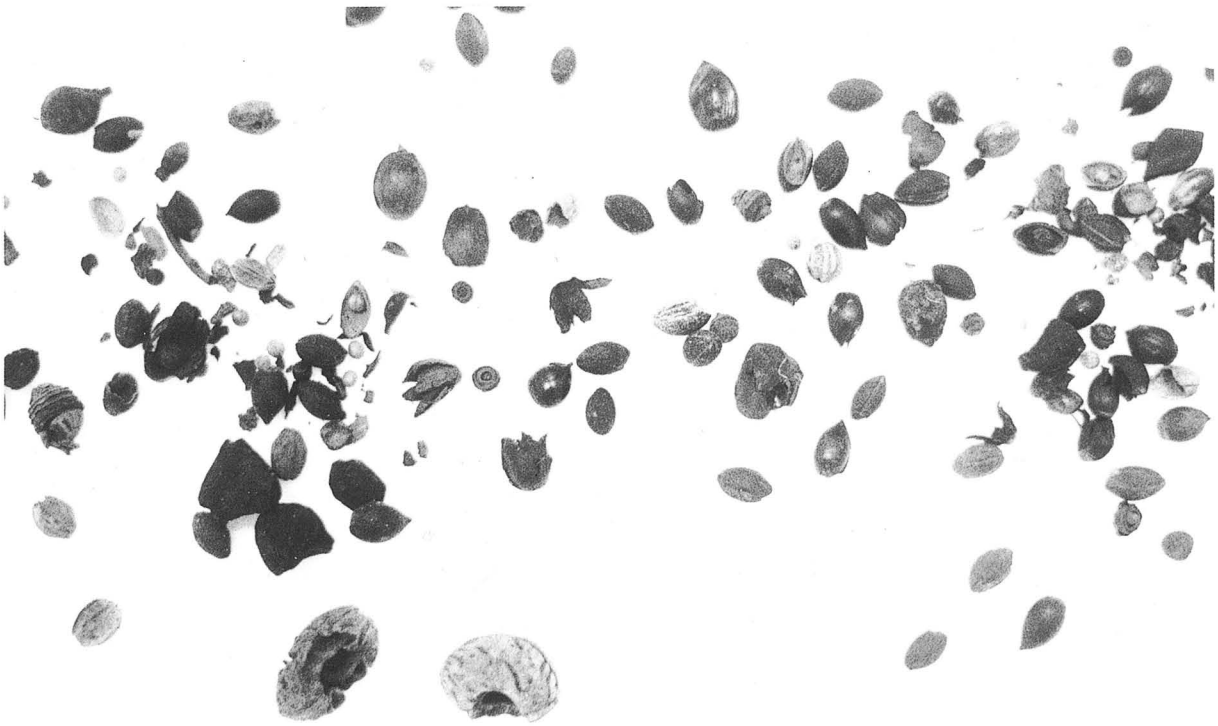


21－31

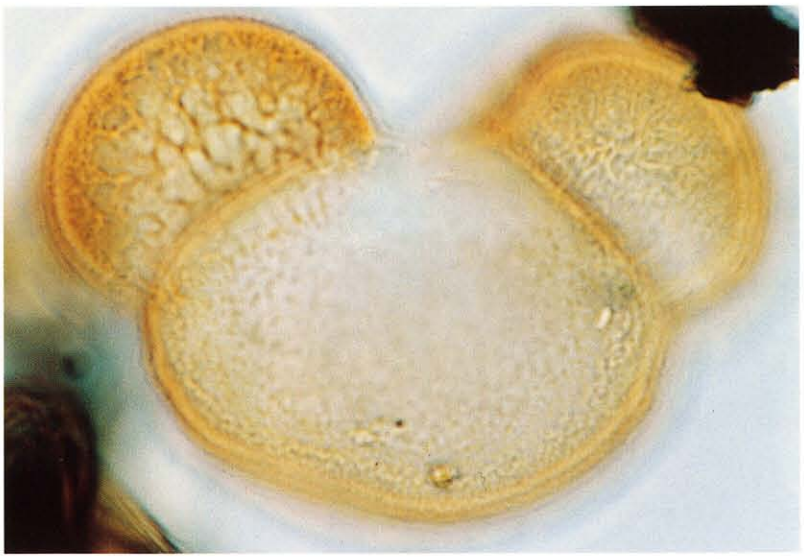
21－20

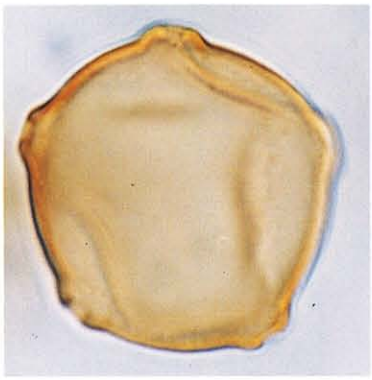


21－41



Ⅲ区　第１調査区下層出土種子


1

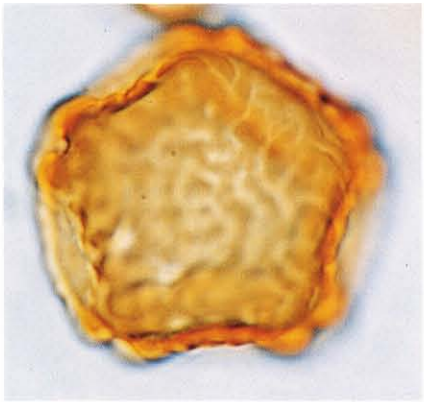

2

3

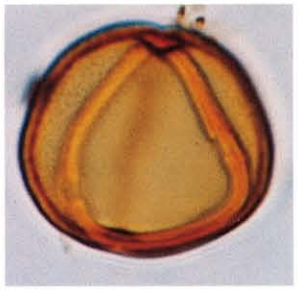
4

5

6


7

9

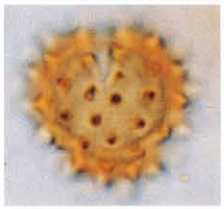

12

11

10

8

14


13

1998年3月30日

国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

荒船古墳群・荒船遺跡
本庄川流域条里遺跡(2)

編集・発行　島根県教育庁文化財課
島根県埋蔵文化財調査センター
松江市打出町33

印刷・製本　株式会社 武　永　印　刷
出雲市江田町208－1